

飯田古屋敷遺跡

飯田雨水排水ポンプ場建設
にともなう発掘調査報告書

小布施町教育委員会

飯田古屋敷遺跡

飯田雨水排水ポンプ場建設
にともなう発掘調査報告書

小布施町教育委員会

序

飯田古屋敷遺跡の所在する小布施町は、善光寺平の東縁いわゆる河東地域にひらけた松川扇状地の右扇にあたります。この右扇は別に小布施扇状地ともよばれ半径3km、扇頂の標高は400m、扇端は322mです。松川扇状地の左扇は須坂市の通称日滝原であります。

飯田古屋敷遺跡が立地する松川扇状地は、千曲川の支流松川により形成され、現在の松川を境に右扇と左扇に分かれています。小布施町は右扇の上にひらけており、飯田古屋敷遺跡はその扇端に隣接して所在し、現在の千曲川の河道から約300mの距離にあります。

松川は近世初めに福島正則が治水に大きな成果を上げたと伝えられていることから、扇状地上を乱流していた松川の流路が近世初めに固定され、現在の流路になったと推定されています。飯田古屋敷遺跡は、中世から近世にかけての遺跡であることから、その形成・変遷と松川の治水とは切り離せない関係にあるものと思われ、当町にとっても重要な遺跡の一つであります。

今回、この遺跡内に町の飯田雨水排水ポンプ場建設計画が建設課より提示されました。

これに伴い町教育委員会では、長野県教育委員会文化課のご指導をいただき発掘調査を行い記録保存することになり、発掘調査団を結成し、平成7年11月11日～12月16日まで緊急発掘調査を実施し、調査報告書を発行する運びとなりました。

この調査にご協力いただき調査報告書をまとめていただきました調査員赤塩仁先生をはじめ、調査実施にあたりあらゆる面でご協力を願った皆様方に感謝申し上げ、深甚なる敬意を表し序文といたします。

平成8年3月

小布施町教育委員会

教育長 市村 聡

凡 例

- 1 本書は、小布施町排水ポンプ場建設工事に係わる飯田古屋敷遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書の内容は、本調査実施に先立ち行われた試掘調査の調査報告もかねるものである。
- 3 発掘調査および本書作成にあたり、市川隆之氏、土屋 積氏、鶴田典昭氏、(財)長野県埋蔵文化財センターから御教示・御協力を頂いた。
- 4 本書の執筆分担は以下のとおりである。また、編集・校正は赤塩 仁、黒岩 隆がおこなった。
湯浅憲彦 第1章
赤塩 仁 第2章～第4章
- 5 遺物実測図の縮尺は、1 : 3あるいは1 : 6とし、遺物写真の縮尺は1 : 3とした。
- 6 調査に係わる記録および遺物は、小布施町教育委員会で保管している。

目 次

第1章	はじめに	1
第2章	遺跡と調査の概要	2
1	位置と立地	2
2	既存の遺跡に関する情報	2
3	周辺の遺跡	3
4	調査の方法	4
5	基本層序	4
第3章	検出された遺構と遺物	5
1	調査成果の概要	5
2	遺構	5
3	遺物	16
第4章	まとめ	18

挿 図 目 次

第1図	飯田古屋敷遺跡の位置	2
第2図	調査区周辺図	2
第3図	遺跡の立地と周辺の遺跡	3
第4図	遺跡の範囲と調査区的位置	4
第5図	基本層序	4
第6図	遺構配置と微地形	5
第7図	遺構全体図	6
第8図	遺構配置図(1)	7
第9図	遺構配置図(2)	8
第10図	遺構配置図(3)	9
第11図	SD01土層断面図	10
第12図	SD02土層断面図	10
第13図	SD01内の石組状遺構	11
第14図	SD03土層断面図	12
第15図	SK01	13
第16図	SK02	13
第17図	SK03	13
第18図	SK04	14
第19図	SK05、06	14
第20図	出土遺物(1)	20
第21図	出土遺物(2)	21
第22図	出土遺物(3)	22
第23図	出土遺物(4)	23
第24図	出土遺物(5)	24
第25図	出土遺物(6)	25
第26図	出土遺物(7)	26

写 真 目 次

PL1	出土遺物(1)	27
2	出土遺物(2)	28
3	調査区全景	29
4	調査区北部、調査区中部	30
5	調査区南部、SD01遺物出土状況	31
6	SD01内石組状遺構、SD01完掘(西より)	32
7	SD02完掘(南より)、SD03植物遺体検出状況	33
8	SK01完掘、SK02完掘	34
9	SK03完掘、SK05、06完掘	35
10	SD04完掘、SD05完掘	36
11	調査区全景(調査前)、調査風景	37

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

小布施町飯田地区では、平成2年度から高速道路の建設工事が開始されたことにより、それまで大雨時の滞水地帯としての役割をはたしていた畑や水田がなくなり、雨水が直接周辺の民家や県道（村山・小布施停車場線）に浸水する恐れがでてきた。そこで、飯田ひ管付近に高速道路側道脇の水路を幹線として利用した雨水排水ポンプ場を建設することになった。しかし、建設予定地が中世当地域を治めていたと伝えられる飯田氏の居館跡推定地とされるため、記録保存の必要が生じ、緊急発掘調査を行うこととなった。

本調査は飯田雨水排水ポンプ場建設にともなう緊急発掘調査である。

<計画内容>

建設面積 373.78㎡

所在地 上高井郡小布施町大字飯田字古屋敷490-1

規模 鉄筋コンクリート2階建て

工期 平成9年3月～

上記建設区域を含む飯田古屋敷遺跡は、当町では重要な遺跡であることから、長野県教育委員会文化課と町教育委員会事務局とが協議し、至急試掘調査を行ったうえで再協議することになった。

試掘調査は平成7年8月8日と9日に行われ、その結果、内耳土器片や鉄滓をはじめとした遺物、土坑や溝と思われる遺構が検出された。また、溝と思われた遺構は、隣接する高速道路及び側道建設時の発掘調査（財団法人長野県埋蔵文化財センターによる）で検出された遺構に連続する可能性が考えられた。

試掘調査の結果をうけた保護協議では、調査団を編成して本調査を実施し、記録保存終了後にポンプ場建設をおこなうことが決定された。

2. 調査体制

調査責任者 市村 聡

事務局 神田 貞信 池田 清人 湯浅 憲彦

調査員 赤塩 仁 黒岩 隆 関 賢司 平岩 昇治（中野実業高校 教諭）

発掘作業員 石川 治 石川 清子 石沢 善藏 伊藤久美子 伊藤 彦市

上島 景作 北沢 栄造 北沢まさ子 関 博行 高木けさ子

塚田 宏 中村 又二 藤木まつゑ 深谷 亘 降旗まつこ

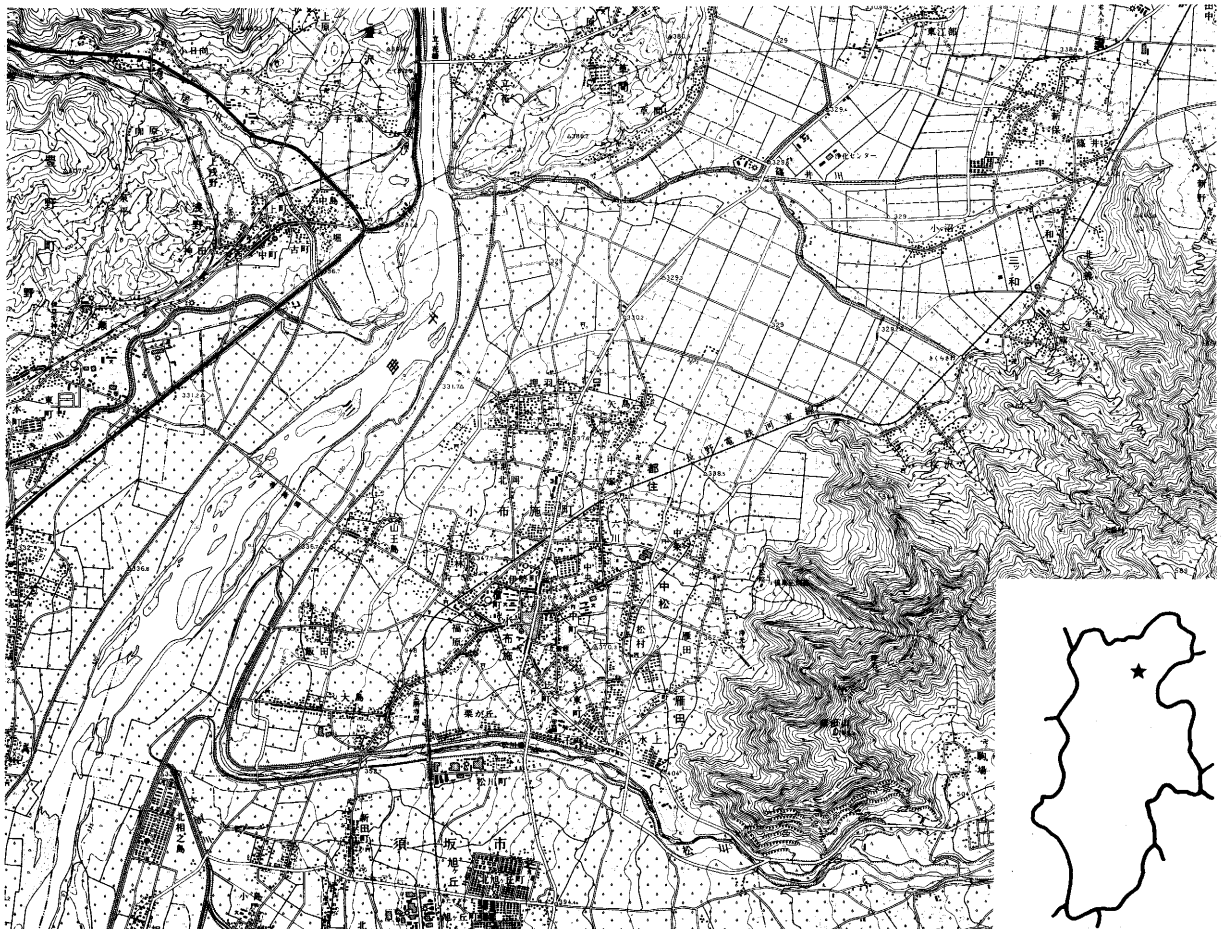
降旗 茂 町田 俊男 松田 正一 松村 明子 和田久美子

整理作業員 太原三保子 小淵まり子 小林 緑 白須けい子 出川 信美

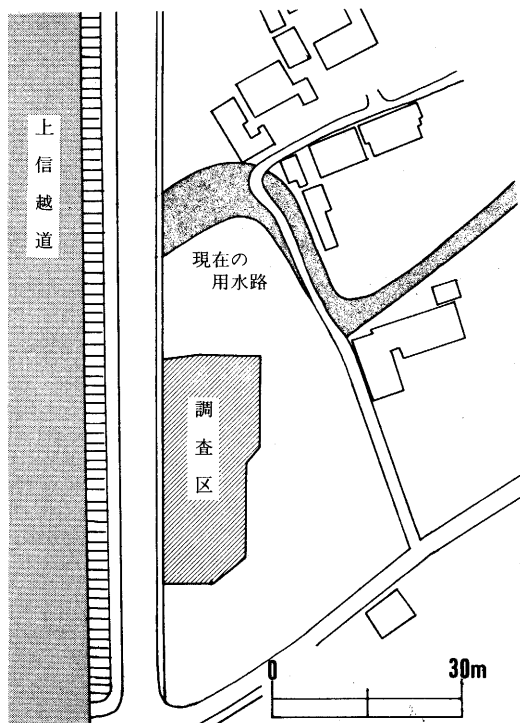
割罫登志子

協力 山本 賢治（髹写真測図研究所）

第2章 遺跡と調査の概要



第1図 飯田古屋敷遺跡の位置 [1 : 50,000]



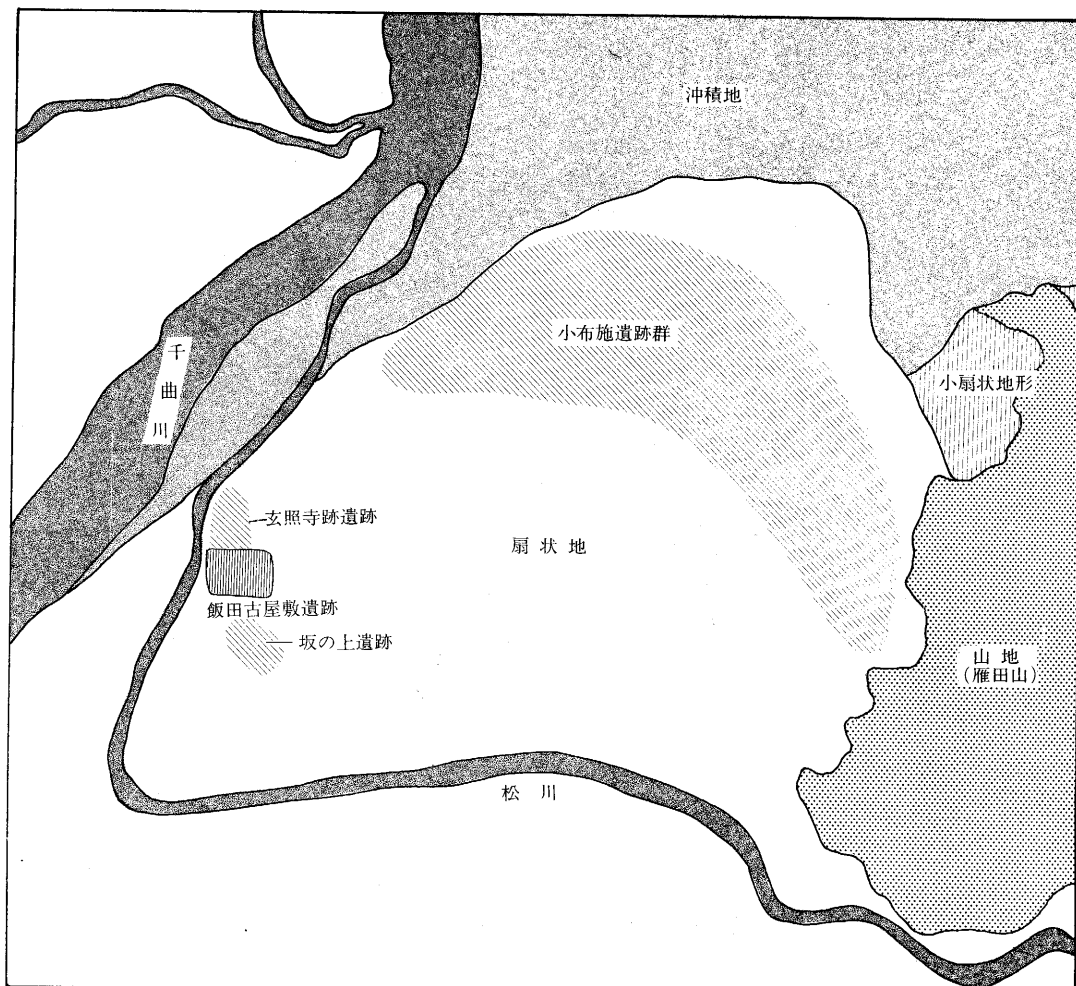
第2図 調査区周辺図 [1 : 1,200]

1. 位置と立地 (第1図～第3図)

本遺跡は、上高井郡小布施町大字飯田字古屋敷490-1他に所在する。千曲川の支流松川が形成する扇状地の末端部に立地し、千曲川河道から300～400m、松川の河道からは約100mの距離にある。松川は現在、千曲川堤防の西側を千曲川とほぼ並行に流れ、遺跡の北約1kmで千曲川と合流する。本調査区の西隣では、平成4年度から5年度にかけて、上信越自動車道および側道建設にともなう発掘調査が、(財)長野県埋蔵文化財センターによって行われた(以後埋文センター調査)。その際、遺跡内の西側を北西から南東に横切る比高差約2mの崖が認められ、千曲川の浸食によるものと推定された。浸食崖上は、東から西にわずかに傾斜をしているものの、ほぼ平坦な地形を呈し、現在は果樹園や畑地として利用されている。

2. 既存の遺跡に関する情報 (第2図)

15世紀半ば頃、飯田古屋敷遺跡周辺は、当地の豪族飯田氏に



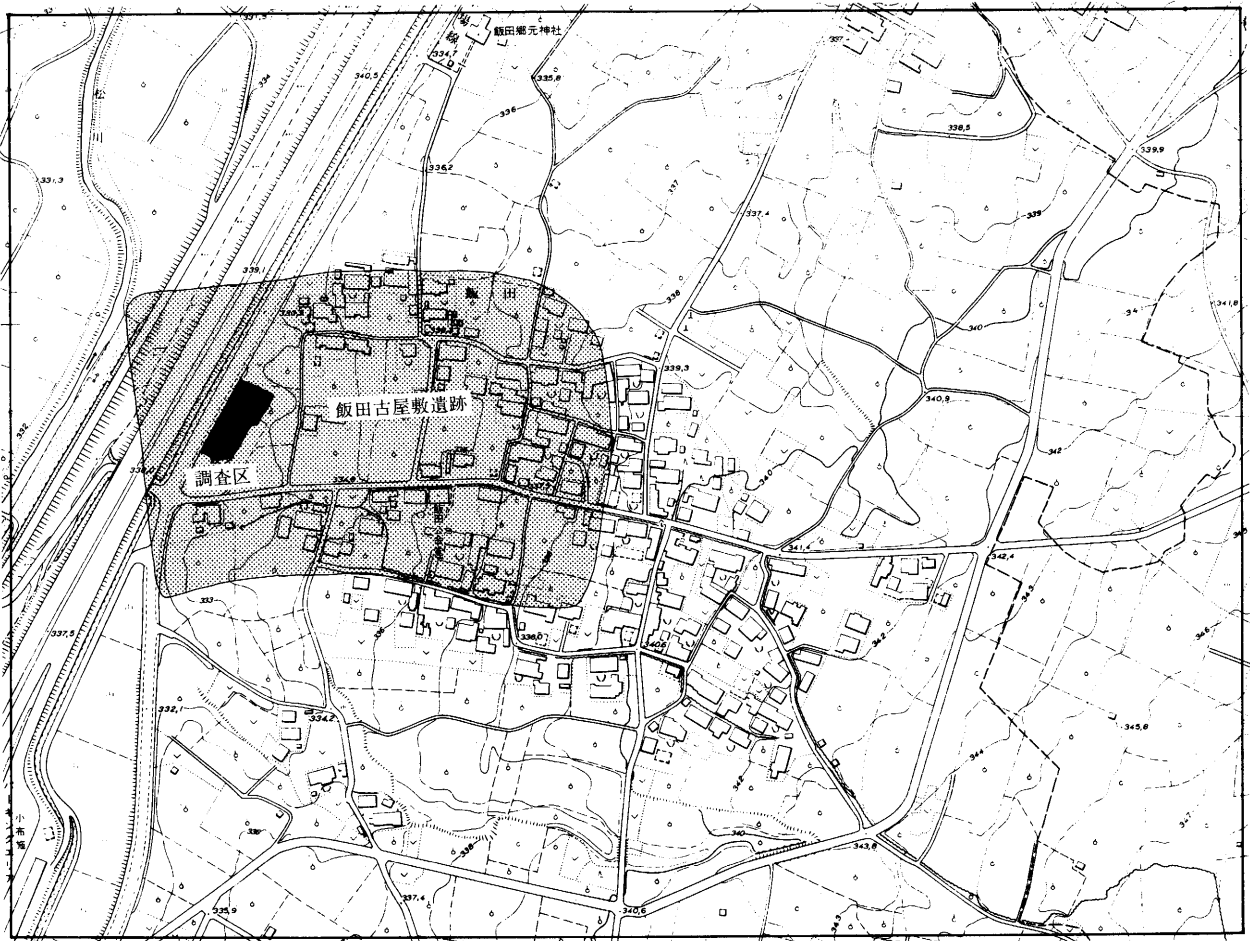
第3図 遺跡の立地と周辺の遺跡 [1 : 50,000]

より治められており、本遺跡はその居館跡とされる(1987 小布施町遺跡詳細分布図)。遺跡内には現在も水路として利用されている鍵の手状に屈折する溝が存在し、居館跡に関連する堀などの遺構と考えられる。前述の埋文センター調査では、今回の調査でも検出された大溝の延長部が見ついているが、掘立柱建物址など直接居館跡に結びつくと思われるような遺構の存在は認められていない。また、遺跡周辺には「前屋敷」「北屋敷」などの小字名が残っており、調査区付近から多量の備蓄銭が出土したとも伝えられている。

3. 周辺の遺跡(第3図)

小布施町は松川扇状地の北半を占める。扇状地の西半や南半は現在の住宅地や市街地と重なる部分が多く、中世から近世の遺跡が点在する。また、北半の扇央から扇端にかけては小布施遺跡群として、古墳時代前期を中心とした遺跡が集中して認められる地域である。そして、東半の山地周辺には、縄文時代の遺跡や古墳が点在する。

本遺跡の北側には、玄照寺跡遺跡が隣接する。玄照寺跡遺跡は、小布施町大島地籍に現存する玄照寺が江戸時代後半まで、所在していたとされる遺跡であるが、埋文センター調査では、直接寺院跡と結びつく遺構遺物の検出はなく、中世末から近世に至る集落跡が認められた。



第4図 遺跡の範囲と調査区の位置 [1 : 5,000]

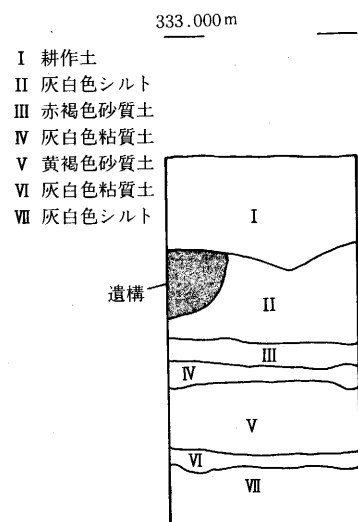
4. 調査の方法

調査区は飯田古屋敷遺跡内の西側ほぼ中央にあたる（第4図）。埋文センター調査範囲（現高速道路及び県道）に隣接する。

調査は重機による表土剥ぎの後、遺構の検出と精査を行った。調査区内には10mグリッドを設定し、遺構の実測はグリッドによる手取り測量と空中測量を実施した。

5. 基本層序（第5図）

表土は果樹園として利用されていた40~50cmの厚さで堆積する耕作土で、それを剥ぐと直下に地山が表れる。遺跡の地山はII層以下で、鉄分を多く含む赤褐色砂質土と灰白色シルト質層が互層に堆積する。遺構はII層に落ち込む形で検出されるが、遺構の覆土にあたるものは基本層序中にはほとんど認められない。しかし表土直下に非常に薄く漸移層的な灰褐色土が堆積する場所があり、耕作などによりほとんどが削られてしまったとも考えられる。



第5図 基本層序 [1 : 40]

第3章 検出された遺構と遺物

1. 調査成果の概要（第6図）

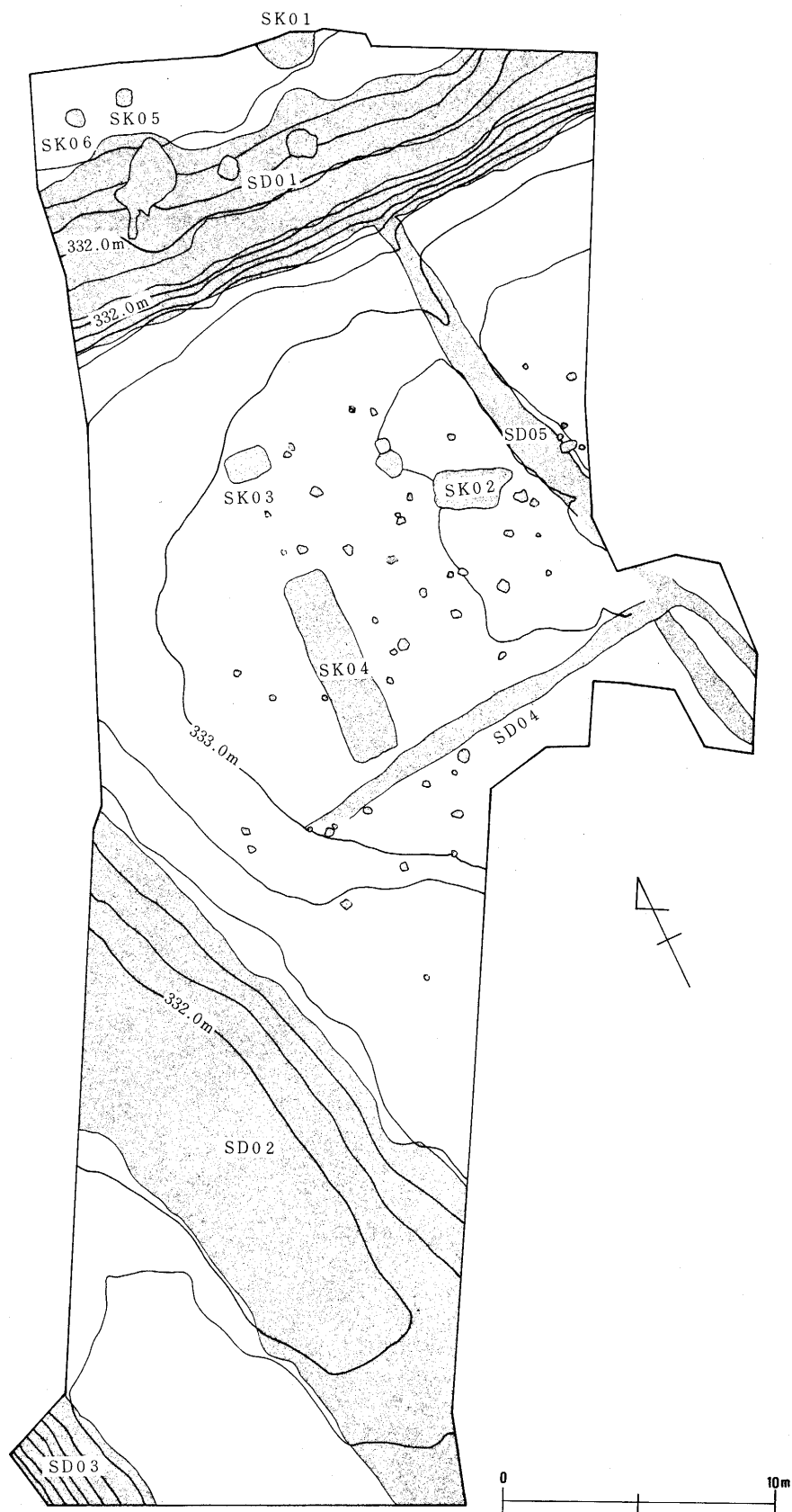
検出された遺構は溝址5、土坑7、焼土址3、ピット多数である。溝には幅3m以上のSD01・02・03と幅50cm程度のSD04・05とがある。SD01はほぼ東西に、SD02・03はほぼ南北に流れ、それらにかこまれた微高地上がSD04・05によってさらに小さく区画されている。そして、土坑や多数のピットはこの区画内に集中する。多数のピットのうち掘立柱建物址を構成すると明確に推定できるものは見出せなかった。

出土遺物の多くはSD01からの出土である。その他の遺構からはほとんど出土していない。また、五輪塔や石臼などの大形の石製品は、表土剥ぎの際耕作土中から出土したものが多。

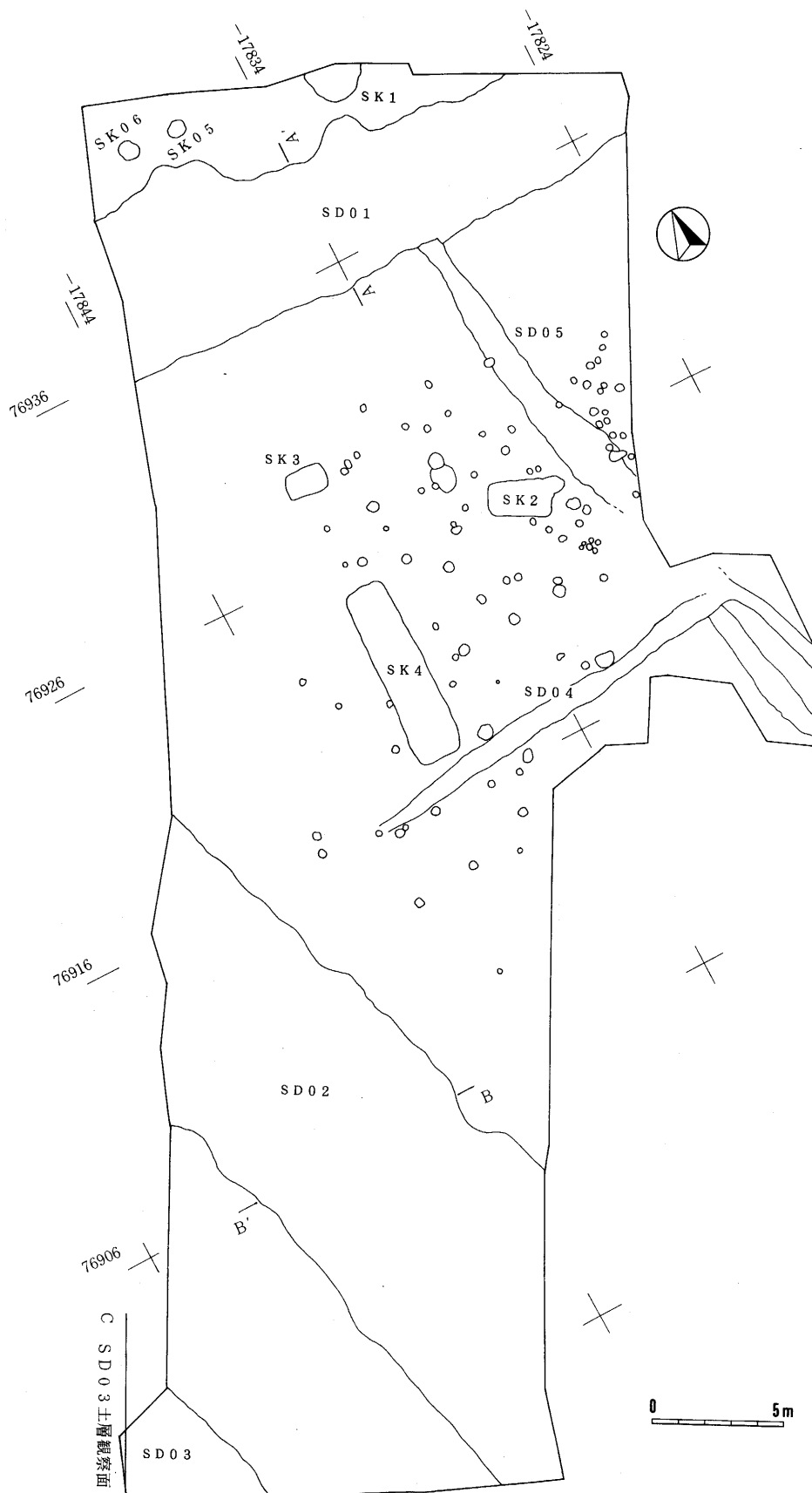
2. 遺構

(1) 溝

大溝3基（SD01～03）と区画のためと思われる小溝2基（SD04～05）が検出された。それぞれがほぼ東西南北の方向に構築され、全体で方形の区画をなしている。埋文センター調査では、SD01と02が本調査区の西側で合流すると推定されている。また、SD03はSD01とは、合流せ



第6図 遺構配置と微地形〔1:250〕



第7図 遺構全体図〔1:250〕

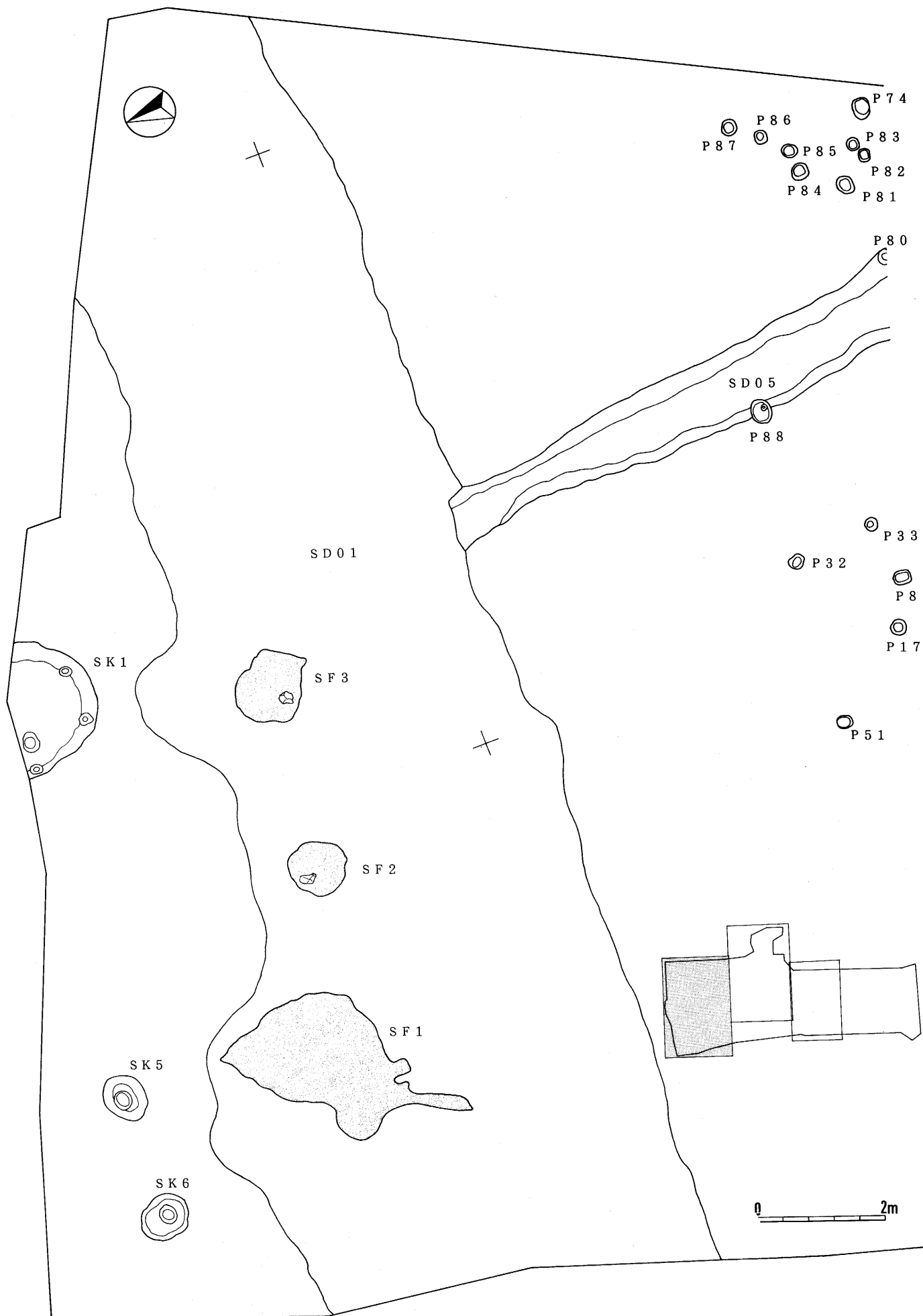
ず、その手前で西方向へほぼ直角に曲がることも判明している。さらに、SD03からは農耕具を含めた多くの木製品が出土している。

SD01 (第11・13図)

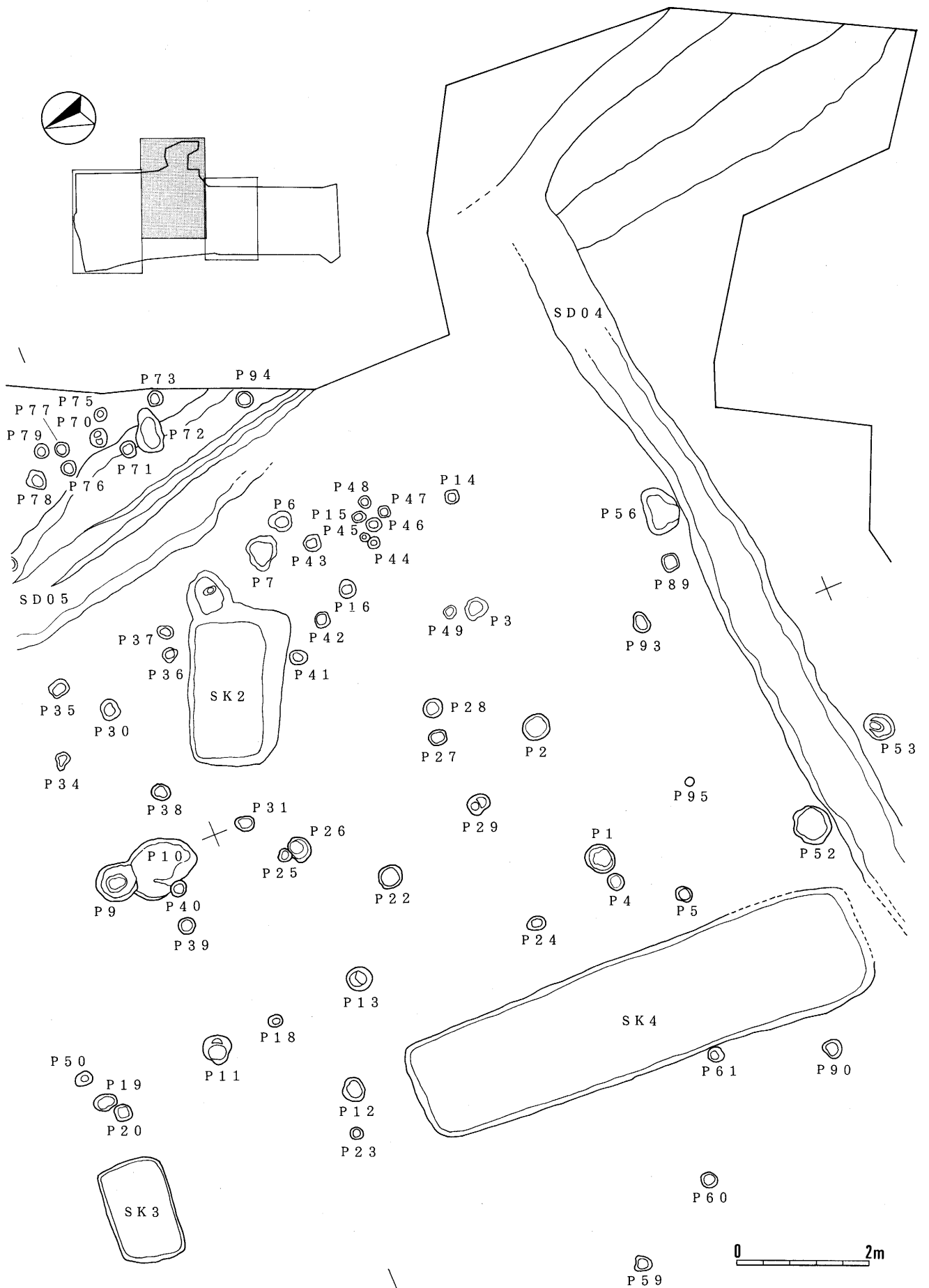
幅約5m深さ約2mを計り、断面はV字状を呈す。遺物は覆土中・下位からは検出されず、覆土上位に集中する。覆土上位の遺物包含層は、土層観察や遺物の出土状況、また後述する石組み遺構の存在などから、二層に分けることができた。このため、それぞれを上層遺物包含層と下層遺物包含層とする。出土遺物の多くは近世の初頭から前半に属する。覆土中・下位からの遺物の出土が無い、溝自体の構築時期ははっきりしないが、中・下位の土砂がかなり厚く堆積していることを考えると、近世前半からある程度の時間をさかのぼらせなければならないかもしれない。また、溝の埋没過程で、最深部が南側にかたよるように土砂が堆積しており、南側壁面の傾斜がきつ、北側壁面は上層ほど緩くなっている。

以下、覆土中・下位と下層遺物包含層、上層遺物包含層の3段階に分けて記述する。

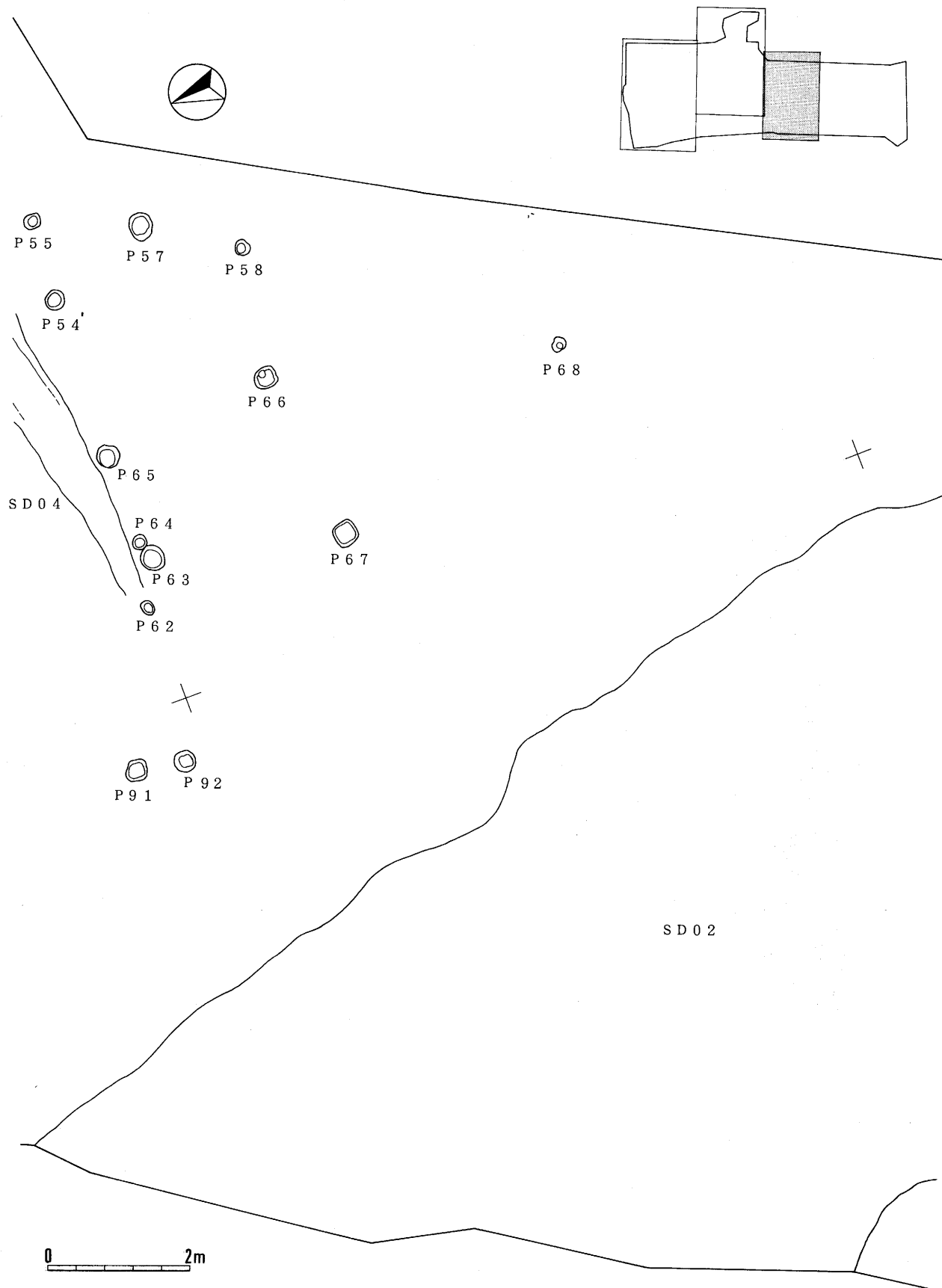
覆土中・下位： 溝自体の断面形態はV字状を呈し、人為的に掘られた可能性がある。しかし、遺物の出土は



第8図 遺構配置図(1) [1:100]

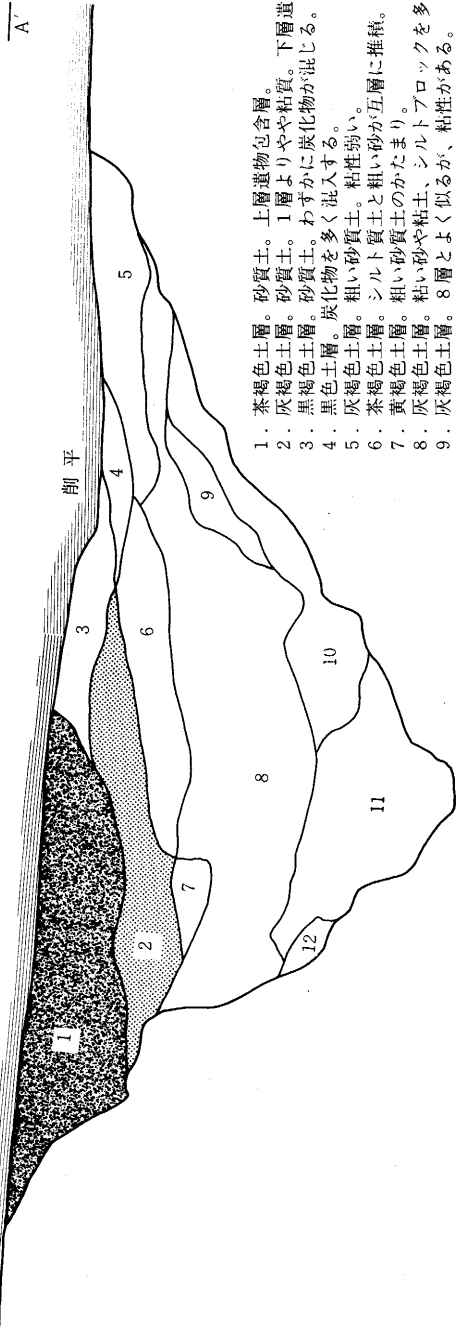


第9図 遺構配置図(2) [1:100]



第10図 遺構配置図(3) [1:100]

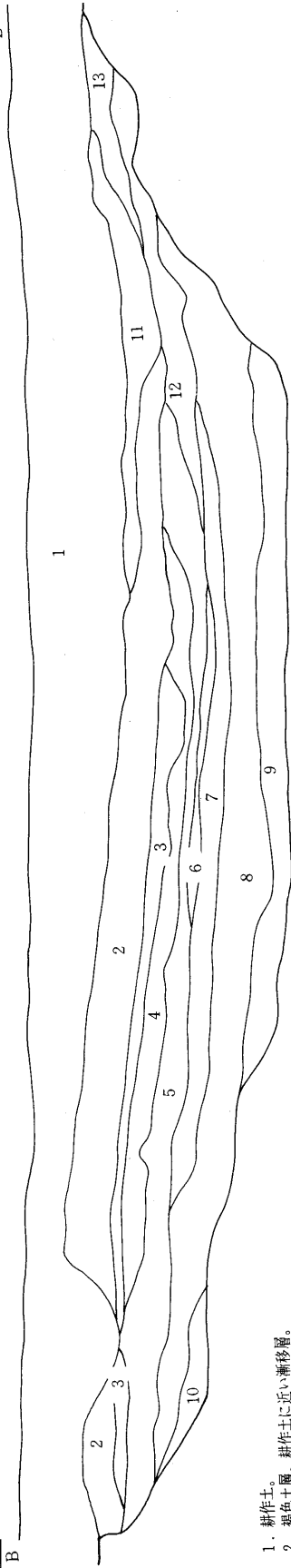
333,000m



1. 茶褐色土層。砂質土。土層遺物包含層。
2. 灰褐色土層。砂質土。1層よりやや粘質。下層遺物包含層。
3. 黒褐色土層。砂質土。わずかに炭化物が混じる。
4. 黒色土層。炭化物を多く混入する。
5. 灰褐色土層。粗い砂質土。粘性弱い。
6. 茶褐色土層。シルト質土と粗い砂が互層に推積。
7. 黄褐色土層。粗い砂質土のかたまり。
8. 灰褐色土層。粘い砂や粘土、シルトブロックを多く含む。
9. 黄褐色土層。8層とよく似るが、粘性がある。
10. 灰褐色土層。地山が崩落したもの。
11. 黒褐色土層。炭化物を多く含む。わずかに植物遺体を含む。
12. 黄褐色土層。粗い砂質土のかたまり。

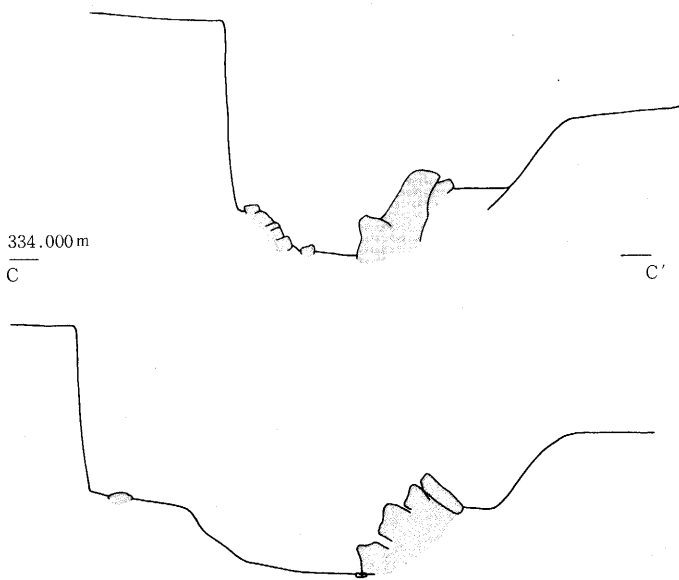
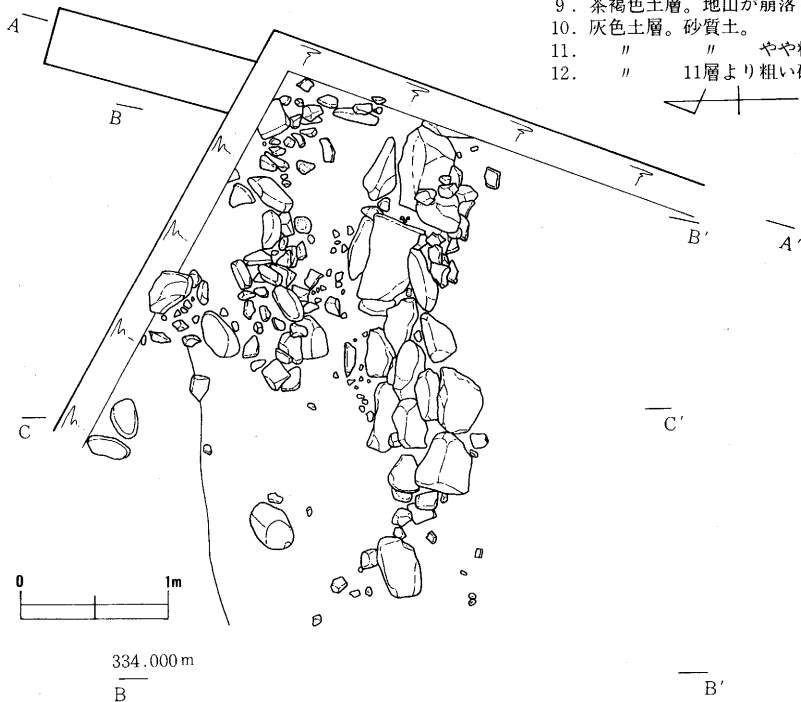
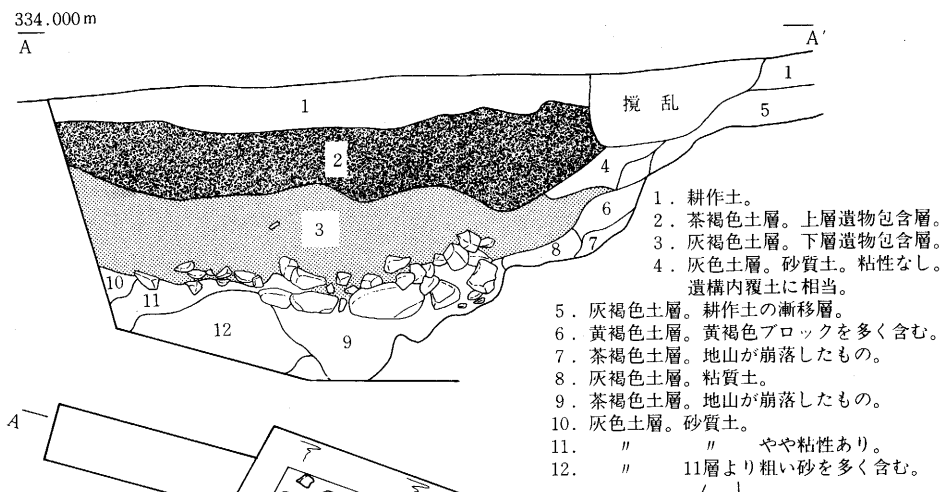
第11図 SD 0 1 土層断面図〔1:40〕

332,500m



1. 耕作土。耕作土に近い漸移層。
2. 褐色土層。耕作土に近い漸移層。
3. 灰黄褐色土。シルトに近い砂質土。粘性なし。
4. 灰黄褐色土。シルトに近い砂質土。粘性なし。
5. 灰褐色土。3層より粘性が強い。炭分のブロックを多く含む。
6. 灰黄褐色土。シルト層。
7. 灰褐色土層。4層に似るが、粘性がある。
8. 灰褐色土層。4層に似るが、白色シルトブロックを多く含む。
9. 灰褐色土層。7層に似るが、灰色が濃く、粘性も強い。
10. 灰褐色土層。8層に似るが、白色シルトブロックをさらに多く含む。
11. 褐色土層。耕作土に近い漸移層。
12. 灰褐色土層。シルトブロックを多く含む粗い砂質土。
13. 褐色土層。耕作土に近いが、白色シルトブロックを多く含む。

第12図 SD 0 2 土層断面図〔1:40〕



第13図 SD01内の石組状遺構〔1:50〕

無く、時期決定の根拠に欠く。興味深いのは、この溝の東側延長上に目をやると、前述した鍵状に曲がる用水路の南角に結びつくことである。

その用水路が真に居館跡にともなう堀であったとすれば、本遺構の構築時期や性格にも一定の方向性が出ようが、居館跡自体の所在が不明な現在の現状では、今後の調査や関連資料の発見を待たざるを得ない。

下層遺物包含層： 中世後半（15～16世紀）に属する遺物が多く出土した。溝の東部を調査中、人頭大の礫が南側壁にそって数個見つかり、精査の結果、溝の両壁にそって幅1

m、深さ70cm、長さ2.5mにわたる石組み遺構が検出された。遺構自体は調査区東側外にも延びるようで、全体の長さは不明である。調査中の状況からは明確な用途を想定するとはできなかったが、視察を頂いた市川氏より、橋にとまなう遺構か何らかの護岸的な石組みの可能性を指摘された。

上層遺物包含層： 近世前半（17世紀代）に属する遺物が最も多く出土した。下層段階より北側の壁面はさらに緩く、その斜面では3カ所で焼土址が検出された。溝の中央部を中心に多量の鉄滓（61kg分）や羽口などが出土し、鍛冶址があったと思われる。流路自体はかなり南側により、しかも細くなっており、この段階以降溝としての機能は失われるようである。

SD02（第12図）

幅約9m、深さ約2mを計る。断面は皿状で、覆土はレンズ状に堆積する。埋文センターの調査によってSD01とほぼ直角に合流することが想定された。遺物が検出されなかったため、遺物から所属時期を判断することはできない。しかし、時期はともかくとして、SD01とこの溝に囲まれた微高地上の区画内で土坑や多数のピット、小溝が検出され、全体で一定の空間を構成していることから、遺跡の性格を考える上で、重要な意味を持つ溝だと考えられる。

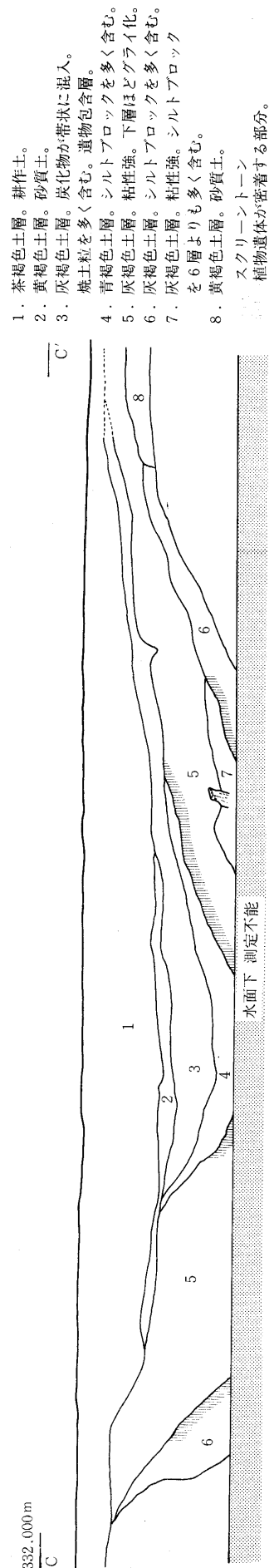
SD03（第14図）

調査区の南西隅で検出されたため、面的には東側壁面を調査できたのみで全体の様子は不明である。ただ、本調査に先だち行った試掘調査では、現用水路の法面において断面観察ができ、また埋文センターの調査においても延長部が調査されている。

特徴として先ず挙げておかなければならないことは、底面から壁面中程にかけて、植物遺体（葦などの植物の茎や葉の部分）が、びっしりと敷き詰められたように堆積していることである。さらにそれは、間層をはさんで二層で認められ、少なくとも二時期に分かれて堆積していることが断面観察から判明した。自然の営為でできるものとは思えない検出状況であったが、人為的なものと積極的に評価できる根拠も発掘調査では見つからなかった。仮に、人為的な所産であるとしても、いかなる目的で作られたものか不明である。今後の資料の増加を待ちたいと思う。面的な調査ができなかったうえ、覆土上層から内耳鍋の破片が数片出土したのみで、時期決定の根拠に欠く。

SD04・05（第7図）

SD01と02に囲まれた微高地上を、さらにほぼ東西南北に区画する小溝である。幅は50cm～70cm、深さは約20cmを計る。遺物の出土は無い。覆土は単層で、他のピットや土坑と同じ土質である。調査区東部では、SD04と05の関係を判断するため、調査区を一部拡張して検出作業のみを行った。結果、



第14図 SD03土層断面図〔1:40〕

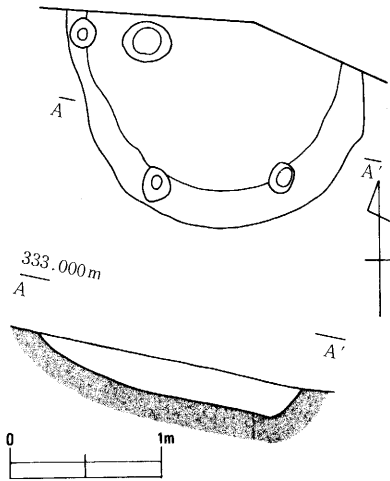
双方の溝が交差することが判明し、交差する付近からさらに南へ延びる小溝も検出された。

(2) 土坑

SD01を境に北側で3基(SK01・05・06)、南側で3基(SK02~04)が検出された。いずれの遺構からも遺物は出土せず、他の遺構との関係から時期を想定せざるを得ない。南側の3基については、遺物が多く出土したSD01や他の遺構との有機的な関係が想定することができるが、北側の3基については調査区外との境界に近く、周辺の遺構配置が不明なため、詳細は不明である。

SK01 (第15図)

北側半分は調査区外に出てしまうが、深さ約10cm、直径約2mの不整形円形を呈すると思われる。土坑内の壁際に本遺構に付属すると考えられる深さ約15cm、径約20cmの円形ピットが3基検出された。遺物の出土はなく、時期は不明である。



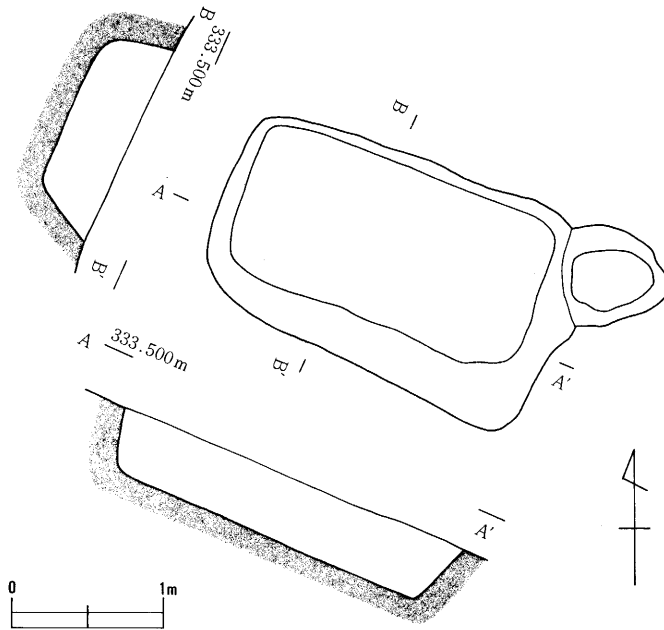
第15図 SK01 [1:50]

SK02 (第16図)

2.5m×1.4m、深さ約40cmの長方形を呈す。壁の立ち上がりはきつく、底面は水平である。北東隅に径約70cm、深さ約20cmの土坑状の落ち込みがあり、覆土の違いから本遺構の後に掘り込まれたものと考えられる。

SK03 (第17図)

1.6m×1.0m、深さ約40cmの長方形を呈す。壁の立ち上がりはきつく、底面は水平である。長軸は東西方向からわずかにずれるが、SD01やSD04とはほぼ平行である。出土遺物は無い。



第16図 SK02 [1:50]

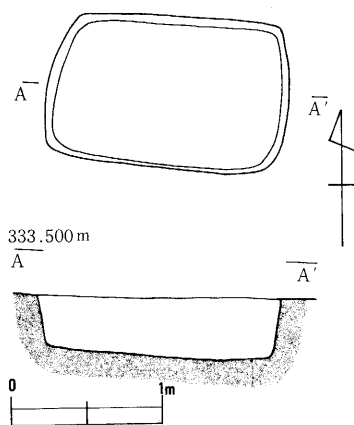
SK04 (第18図)

7.2m×1.8mの南北に細長い長方形を呈す。壁の立ち上がりはきつく、底面は水平である。遺物は出土していない。SK03の南側に位置し、長軸はSD05と並行し、SD04とは直交する配置になる。SD04・05と同時期に、何らかの役割を果たしていた土坑であると思われる。

SK05・06 (第19図)

双方とも柱根を有し、調査区外に及ぶ掘立柱建物址の柱跡の一部と考えられる。

出土遺物が無く、時期は不明である。SK05は深さ約40cm、径約70cmの円形を呈す。検出面より約25cm下にテラスを有し、そこからさらに15cmの落ち込みとなる。SK06は深さ約45cm、径約70cmの円形を呈す。検出面より約25cm下にテラスを有して、そこからさらに15cmの落ち込みとなる。



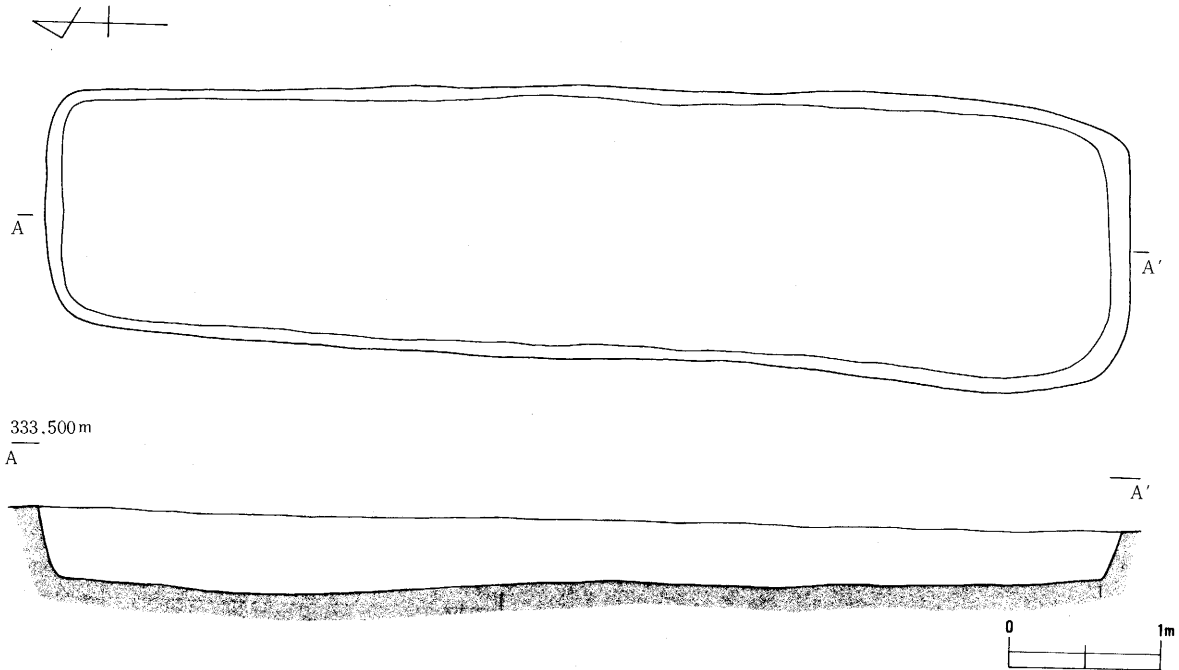
第17図 SK03 [1:50]

(3) 焼土址 (第8図)

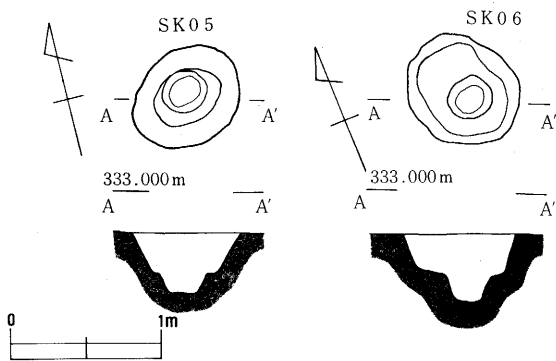
SF01~03の3基が検出された。どの遺構も掘り込みはほとんどなく、数センチの焼土が堆積するのみである。SD01上層遺物包含層中に検出され、付近から多量の鉄滓や羽口などが出土していることから、簡易な鍛冶址と考えられる。

(4) ピット (第8~10図)

検出されたピットは80基である。掘立柱建物址を構成すると思われるものもあるが、多くは規則的な配置等認められるものではなかった。また、遺物の出土はどの遺構からも無かった。記載は以下の表にかえる。



第18図 SK04 [1:50]



第19図 SK05、06 [1:50]

第1表 ピット計測表

pit NO	幅×深さ (cm)	pit NO	幅×深さ (cm)	pit NO	幅×深さ (cm)	pit NO	幅×深さ (cm)
1	2.0×1.2	21	0.8×0.5	41	1.0×0.6	61	1.2×0.5
2	1.8×2.0	22	1.7×0.6	42	0.9×0.5	62	1.0×0.5
3	2.3×2.4	23	0.7×1.0	43	1.0×0.7	63	1.5×0.9
4	1.3×0.7	24	1.0×1.0	44	0.7×1.0	64	0.9×0.4
5	1.0×0.3	25	1.0×0.3	45	0.7×0.1	65	1.6×1.5
6	1.3×1.1	26	1.8×0.7	46	1.0×0.8	66	1.3×0.4
7	2.5×0.8	27	1.1×0.4	47	0.9×1.2	67	1.6×0.6
8	1.0×1.1	28	1.2×0.3	48	0.8×0.3	68	1.0×0.9
9	3.1×1.9	29	1.4×1.5	49	1.3×0.7	69	0.8×0.8
10	4.7×0.7	30	1.3×1.3	50	0.9×0.3	70	1.4×1.0
11	2.0×1.4	31	1.0×0.5	51	1.0×0.2	71	1.2×0.4
12	2.0×1.0	32	0.9×0.4	52	2.8×0.8	72	3.5×0.7
13	1.5×2.3	33	0.9×0.5	53	1.7×0.6	73	1.0×0.8
14	1.0×1.0	34	1.1×0.2	54	1.2×0.5	74	1.5×0.3
15	0.8×1.3	35	1.3×0.7	55	0.8×0.5	75	0.4×0.7
16	1.2×0.8	36	1.1×0.7	56	3.5×1.1	76	1.0×0.6
17	1.0×0.6	37	0.9×0.5	57	1.7×1.3	77	0.9×0.7
18	0.8×0.5	38	1.2×0.4	58	0.9×0.6	78	1.2×0.6
19	1.1×0.5	39	1.0×0.4	59	1.2×0.6	79	0.9×0.7
20	1.2×0.8	40	1.0×0.5	60	1.0×0.4	80	0.9×0.4

3. 遺物

出土した土器・陶磁器のほとんどは、SD01からの出土である。時期的には、16世紀後半から17世紀代の遺物が主体ではないかというご指摘を市川氏より頂いた。詳細は以下の観察表による。

SD01からは五輪塔や石臼片などもわずかに出土しているが、多くは表土剥ぎの際、耕作土中や耕作土直下から出土したもので、図示したものはそれらの石製品である。

第2表 土器観察表

挿 番 号	法量(口径×器高)	出土位置	備 考
1	6.6×1.8	SD01	内外面とも全体に磨耗している。
2	8.1×1.5	"	内外面とも全体に磨耗が著しい。
3	8.6×2.5	"	ヨコナデによって凹む。
4	9.4×2.5	"	強いヨコナデによって端部わずかに外反。糸切り。
5	9.5×3.0	"	
6	10.2×2.4	"	ヨコナデによって端部わずかに外反。端部直下も微妙にくぼむ。底部付近の外面整形はかなり雑でヘラ状? 工具でナデたような跡もある。糸切り。
7	9.7×2.6	"	かなり雑な糸切りで凹凸が激しい強いヨコナデ。
8	10.1×2.3	"	ヨコナデによって先端のみ内湾する。底部全体に糸切り痕。
9	12.0×1.9	"	糸切り。
10	10.6×2.6	"	ヨコナデにより端部わずかに外反。糸切り磨耗が激しい。160香炉
11	口径 10.9	"	内外面とも白色を基調に茶色や黄褐色のウワグスリが斑点状にかかっている。
12	口径 9.2	"	灰暗色。須恵質。全面ミガキ。底面との境2つ稜?
13	口径 12.2	"	口縁部肥厚。
14	口径 11.5	"	内外面とも備前焼のような色をしている。
15	口径 14.4	"	焼成良好(素焼)。ロクロ成形明瞭。
16	12.5×3.2	"	黄褐色の素焼上に釉。焼き良い。17C前半唐津皿。灰緑色釉。茶褐色に変質。
17	口径 10.0	"	茶褐色ウワグスリに黒色の帯状の模様。17C唐津皿。
18	口径 11.8	"	緑ウワグスリ。
19	口径 4.4	"	
20	14.8×3.7	"	ロクロ痕。
21	底径 5.5	"	焼成がカワラケにくらべて良好。明瞭な糸切り痕。
22	底径 4.6	"	17C前半。唐津産碗。鉄釉。
23	底径 5.2	"	灰色釉。ロクロ痕。ヘラケズリ後ミガキ? 17C前半。唐津碗。
24	底径 5.5	"	青磁(13C?)。全体に均一の釉がかかる(内外面ともロクロ痕)。
25	底径 4.4	"	17C前半 唐津産碗。鉄釉。ロクロ痕。
26	口径 10.0	"	
27	底径 4.8	"	鉄釉。17C前半 唐津碗。
28	口径 15.3	"	青磁碗(龍泉窯系)。焼成良質。15C後半。複弁蓮華文。

挿 図 番 号	法量(口径×器高)	出土位置	備	考
29	底測定不能	"		
30	10.0×2.2	"		
31	10.0×2.0	"	大窯(内ハゲ皿)。16C中頃。	
32	11.0×2.5	SD01		
33	底径 8.0	"	大窯。稜皿。鉄釉。	
34	底径 6.0	"	大窯(瀬戸、美濃)	
35	12.5×3.2	SD02	15~16C 中国産白磁。	
36	口径 10.0	SD01		
37	底径 8.0	"	16C 大窯。	
38	底径 4.1	SD02	白磁? 白色釉。	
39	底径 4.7	SD01	16C後半 唐津 輪ハゲ痕。明瞭なロクロ痕。	
40	底径 4.3	SD01 SD02	16C後半 唐津 輪ハゲ痕。	
41	底径 6.0	SD01	志野焼(17C初頭)。墨による模様「田」のように読めるが、釉が部分的にかかりはっきりとは読み取れない。	
42	底径 10.0	"		
43				
44				
45	底径 9.5	"	挿り鉢	
46	口径 21.6	"		
47	外径約50cm	"	内耳鍋	
48	底径 10.0	SD01	挿り鉢	
49	45.2×5.3	"	内耳鍋	
50	40.0×8.1	"	内耳鍋	
51	口径 40.0	"	内耳鍋	
52	40.0×12.1	SD03	内耳鍋	
53	口径 36.0	SD01	内耳鍋	
54	口径 38.0	"	内耳鍋	
55	口径 35.9	SF01	内耳鍋	
56	口径 34.0	ST03	内耳鍋	
57	口径 30.6	SD01	内耳鍋	
58	外径約 32.4	"	内耳鍋	
59	外径約 26.6	"	内耳鍋	
60	外径約 26.8	"	内耳鍋	
61	口径 24.0	"	内耳鍋	

第4章 まとめ

今回の調査では、大きな区画を構成する3本の大溝と小さな区画を構成する2本の小溝が検出され、区画内からは6基の土坑や数多くのピットが検出された。そんな点から大溝の配置やそれらの変遷が、遺跡の性格を考えるうえで重要と考える。そこで、本章では大溝の配置と変遷に的を絞って考察を加えまとめにかきたい。ただし、調査範囲が狭いうえ遺構単位の遺物の出土が少ないなど状況証拠が少ないなかでの考察のため、推論に推論を重ねる結果になることを前置きしておきたい。

今回の調査では検出された3本の大溝は、ほぼ東西南北に遺跡内を大きく区画している。ただ、配置に目をやると、それらすべてが同時に存在していたとは考えにくく、2本ずつが併存して大区画を構成し、変遷したと考えるのが妥当である。

遺跡内の区画を構成するうえで最も重要な役割りを果たしていたのは、SD01である。その理由として、断面形態がV字状を呈することから人為的に構築された可能性が考えられる点や、2面の遺物包含層が検出され、さらにその下層に無遺物層ではあるがかなりの土砂が堆積していた点などをあげることができる。また、このことから、SD01がある程度の時間幅を有していることも想像される。さらに注目しなければならないことは、その東側延長線が鍵の手状に屈折する現用水路の南端角にあたることである。

SD01は時期が新しくなるにつれ流路幅が狭くなり、最終的に溝としての機能を終えることが発掘調査で明らかになった。そう考えると、SD01の溝としての機能と終了と現用水路の構築が有機的に結びつくのである。つまり、何らかの目的でSD01が現用水路の形状に改修されたと考えることができるのである。SD01上層遺物包含層から出土した遺物の主体が近世前半（17世紀代）であるとすれば、その前後に現用水路への改修がおこなわれたことが想定される。

それでは、なぜ現用水路は鍵の手状に屈折しているのだろうか。理由はともかくとして、注目されるのは、SD03が本調査区の北で、現用水路に平行してほぼ直角に屈折していることである（埋文センター調査により判明）。このことから現用水路が構築される以前には、鍵の手状に近い区画を作り出す溝としてSD03が存在していた可能性が考えられる。この頃、既にSD01は存在していたであろうから、ここにSD01とSD03の共存関係が想定される。時期的には、SD01下層遺物包含層出土遺物が主体をなす中世後半（15～16世紀）と考えるのが妥当である。

SD01の遺物包含層は覆土全体では上層部にあたり、それ以下には無遺物層が厚く堆積している。そして、無遺物という点で共通するのはSD02である。また、SD01が東西に、SD02が南北に流れることから両者は調査区の北側で直交すると考えられる（該当付近は、埋文センター調査では年度が異なる調査区のうち、狭い調査区での調査によっているため判然としないが）。初源的な方形区画がどのように構成されたかを考えると、SD01とSD02が直交することによってできる区画を想定することが妥当である。つまり、SD01とSD02によって構成された方形の空間が、その後の土地利用の方向性を決定付けたと言えよう。ただし、遺物の出土が皆無のため、時期を推定することは困難である。

ここまで、時代を遡るかたちでSD01～03の共存関係と時間的な変遷について考えてきた。それをまとめると以下ようになる。

第1段階…SD01とSD02によって区画が構成される段階。時期不明。

第2段階…SD01とSD03によって区画が構成される段階。中世後半（15～16世紀か）。

第3段階…現用水路が構築されるのと前後して、SD01は狭くなり、やがて溝として機能を終了する段階。近世前半（17世紀代か）。

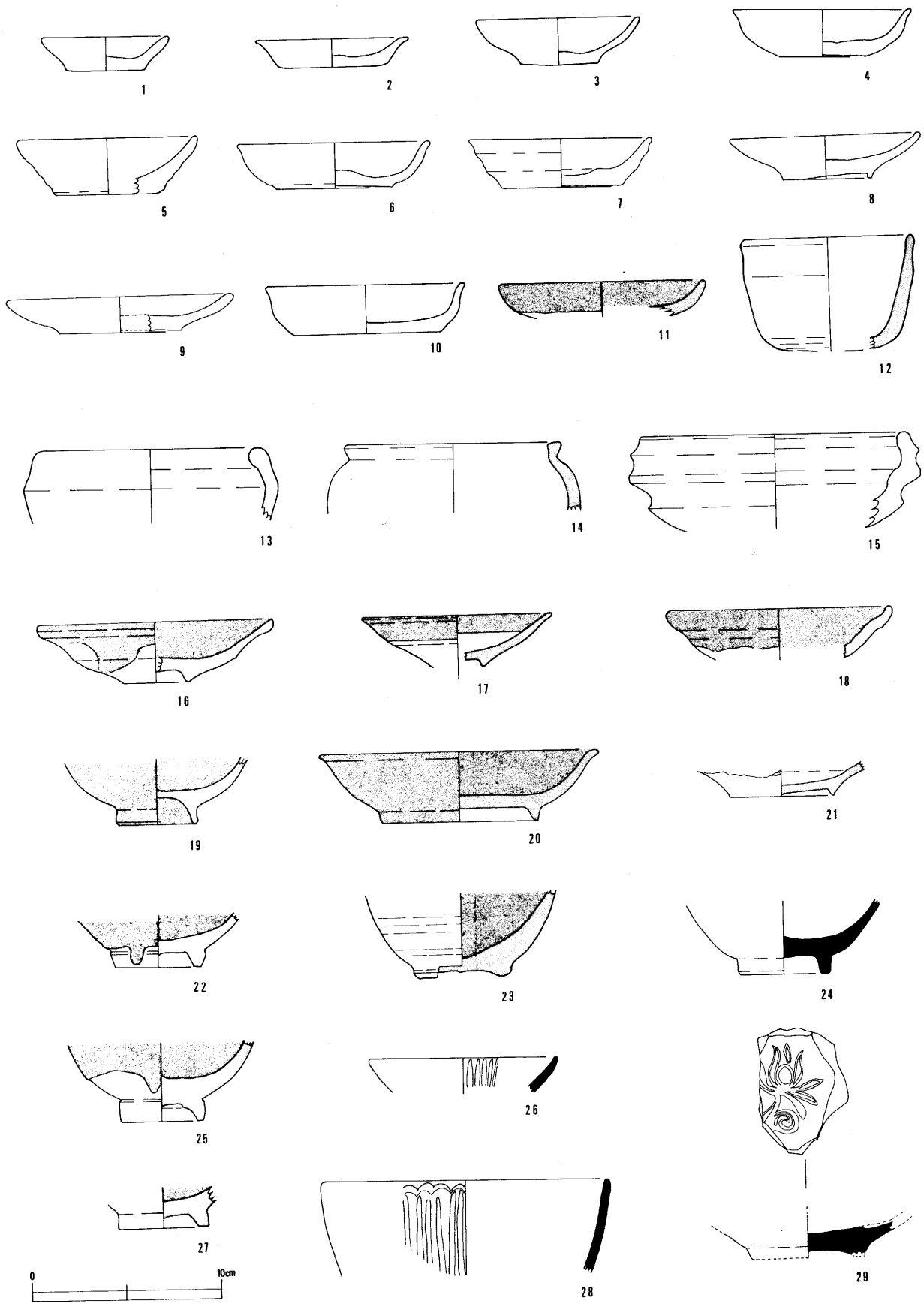
さて、問題として残されるのは、多数のピットや土坑、小溝が前述のどの段階に属するかという点である。しかし、それらの遺構は検出された範囲が狭いうえ、出土遺物も皆無であり、時期を推定するのは困難である。また、SD01～SD03との共存関係から推定するのも無理があり、現状では所属段階を考えるのは差し控えたい。ただし、遺構群自体は本調査区の東側へさらに広がると考えられるため、今後の発掘調査など何らかの機会のなかで、明らかにすることができるであろう。

飯田氏は北信濃の中世史を語るうえで、欠くことができない豪族である。今回の調査では、その居館跡に直接結びつくような遺構・遺物の発見は見られなかった。しかし、検出された遺構群が居館跡と何らかの関係を有する可能性を否定するものではない。逆に、周辺のどこかに居館跡が存在することを想起させるような結果になったのではないかと考える。飯田氏やその居館跡の解明は、小布施の歴史をひも解くうえでも、重要である。今後に残された課題は多いが、その分期待できる内容を十分に有する遺跡である。

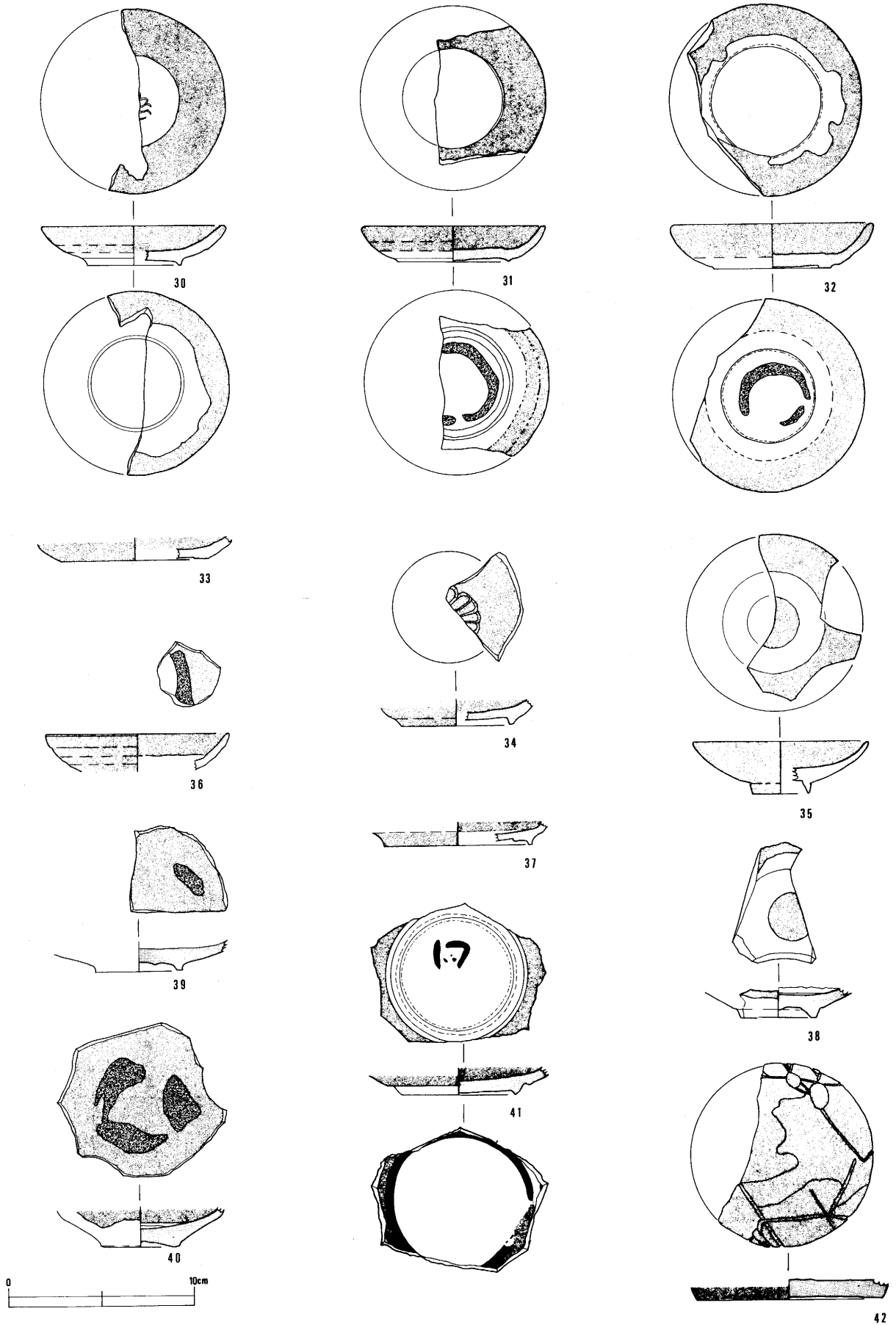
本遺跡の他にも小布施町には貴重な遺跡が数多く存在する。埋蔵文化財に対する小布施町のさらなる理解を懇願し本報文をとじる。

参考引用文献

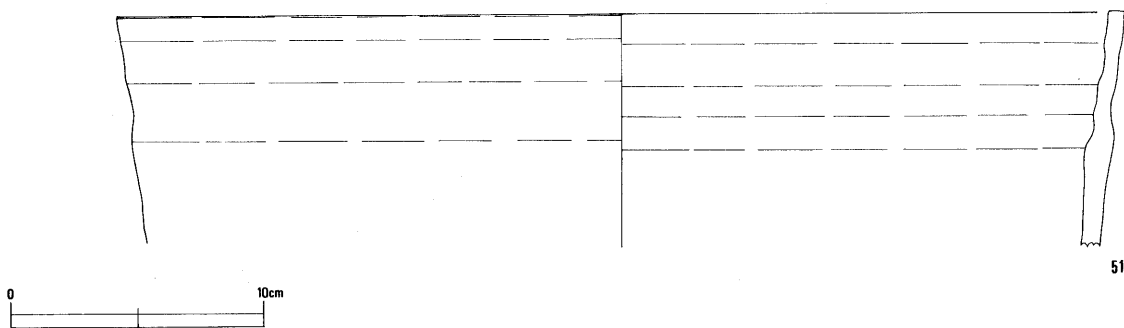
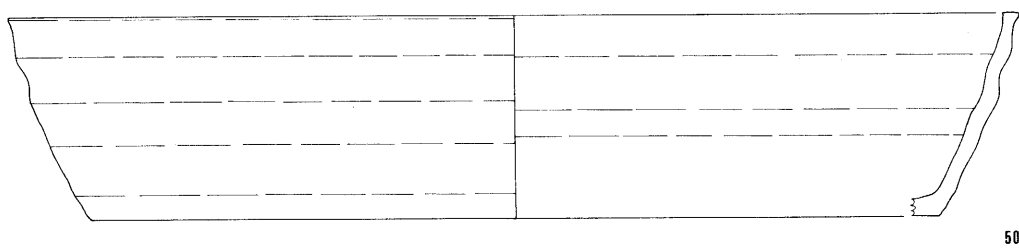
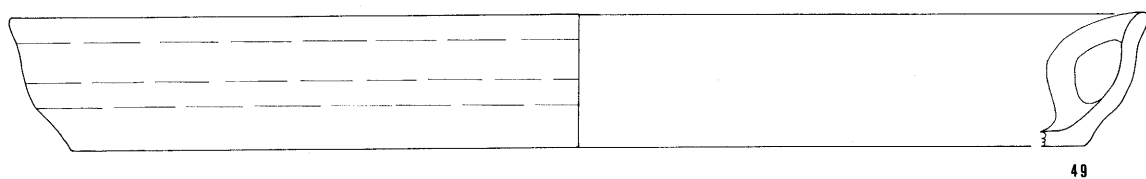
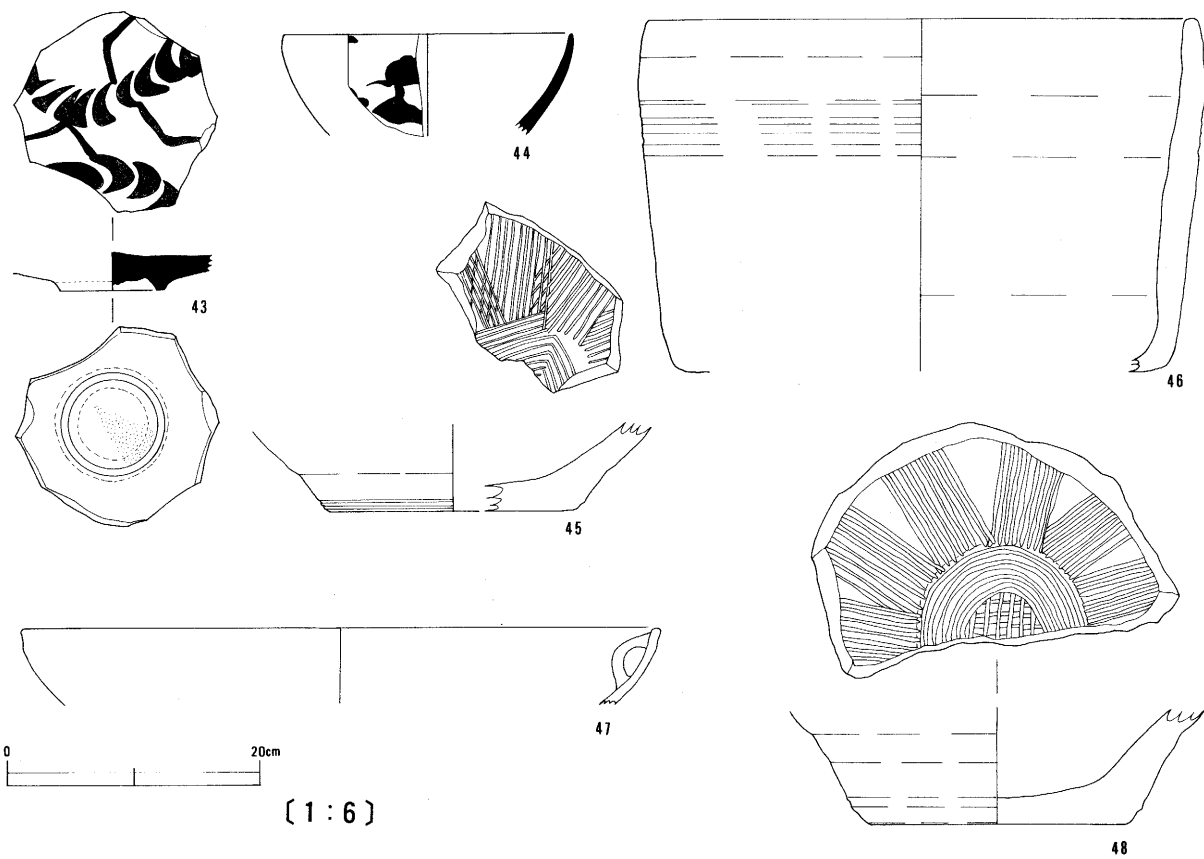
- 1978 『小布施町遺跡詳細分布図』 小布施町教育委員会
- 1992 「飯田古屋敷遺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報9』長野県埋蔵文化財センター
- 1993 「飯田古屋敷遺跡・玄照寺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報10』 長野県埋蔵文化財センター



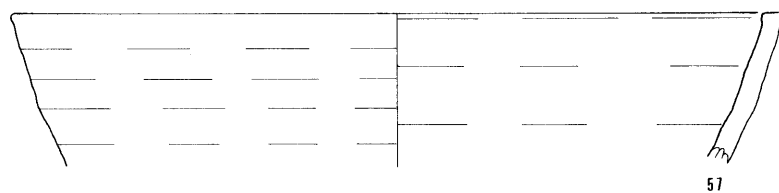
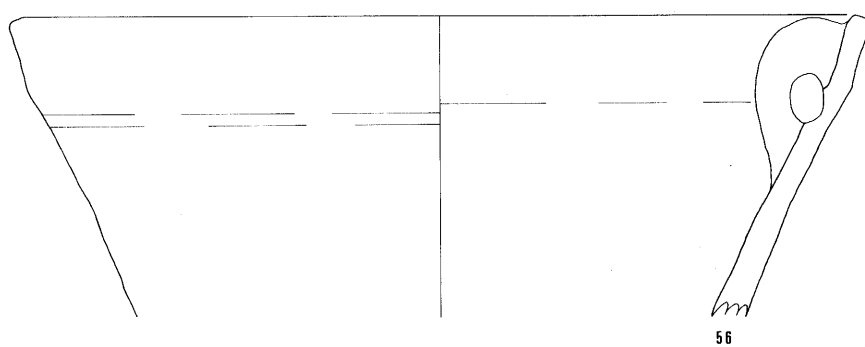
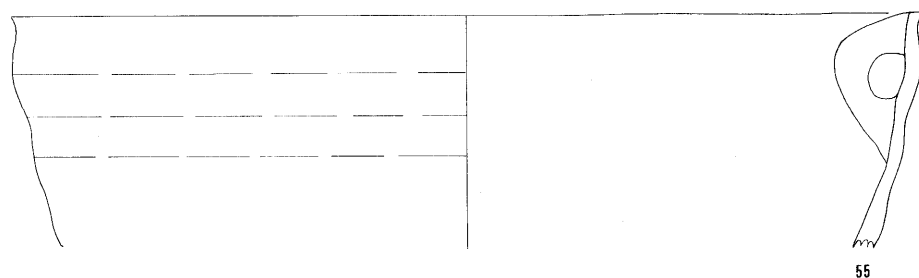
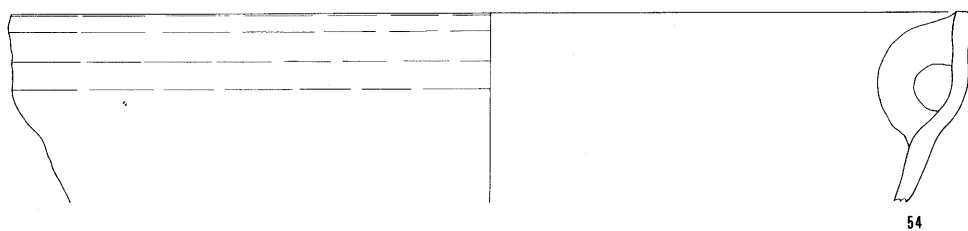
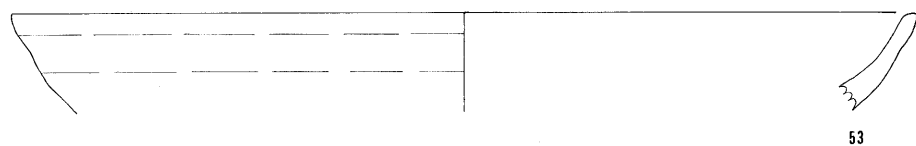
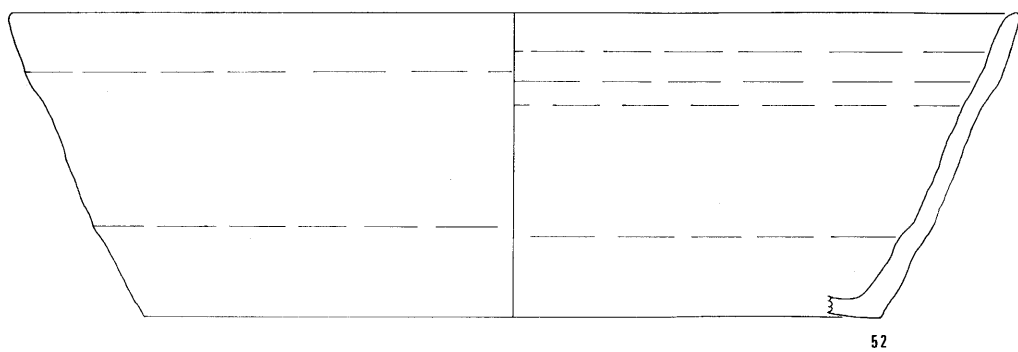
第20図 出土遺物 (1) [1 : 3]



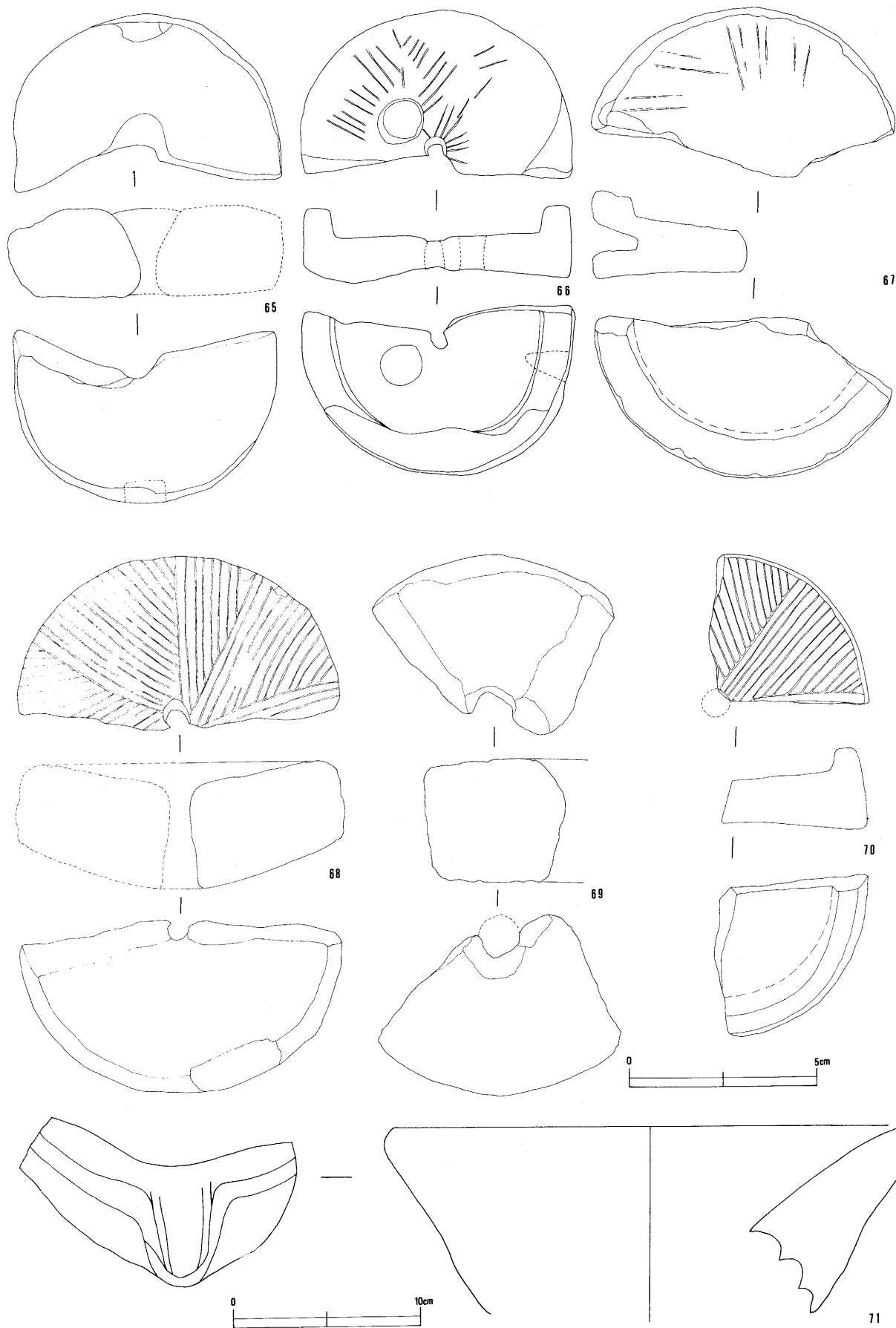
第21図 出土遺物(2) [1:3]



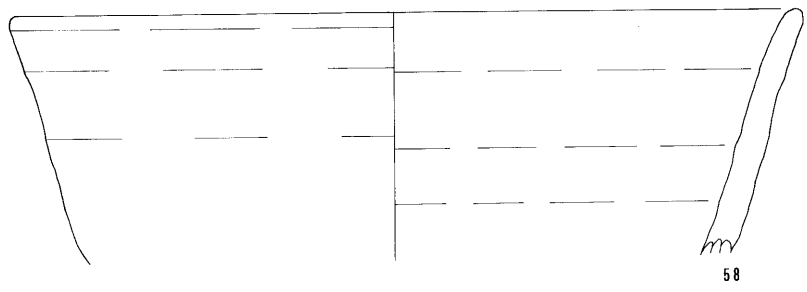
第22図 出土遺物(3) [1:3]



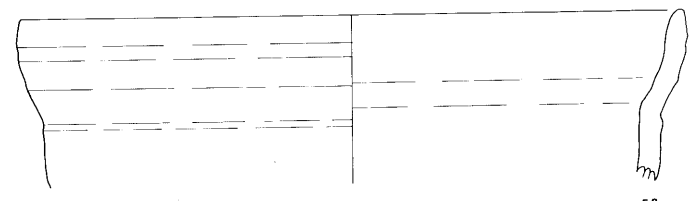
第23図 出土遺物(4) [1:3]



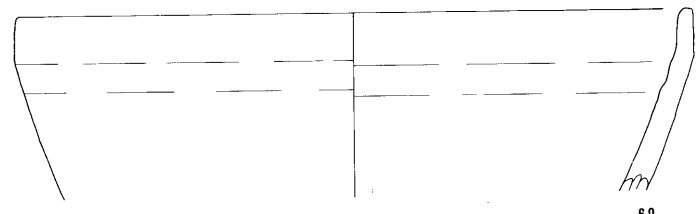
第24図 出土遺物(5) [1:3]



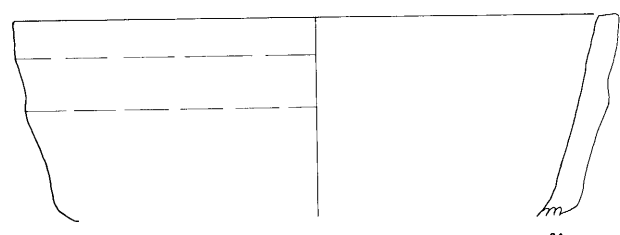
58



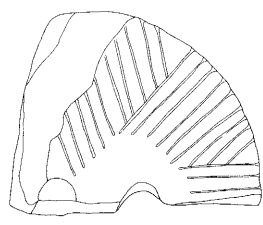
59



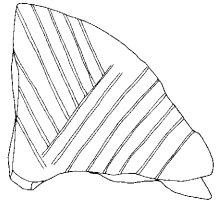
60



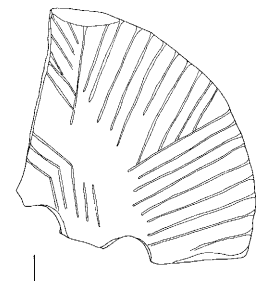
61



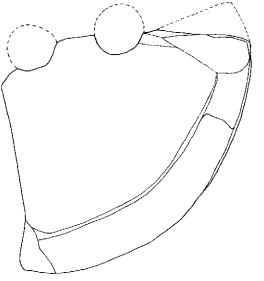
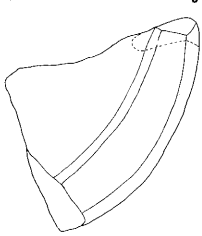
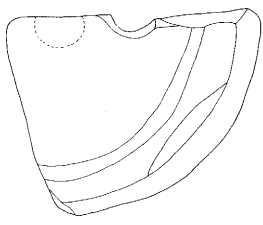
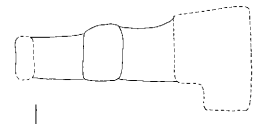
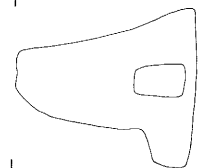
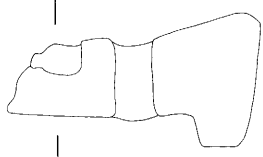
62



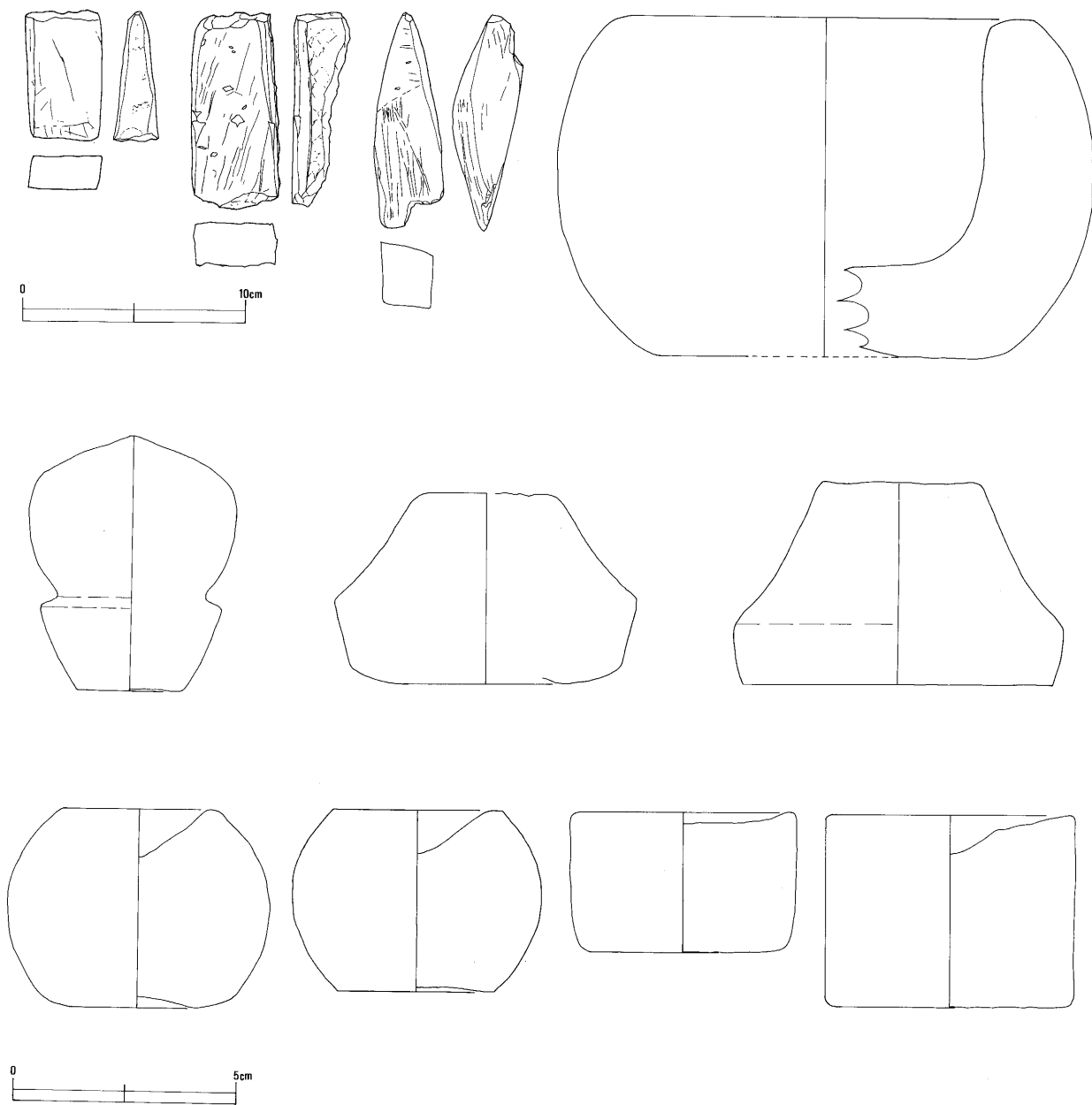
63



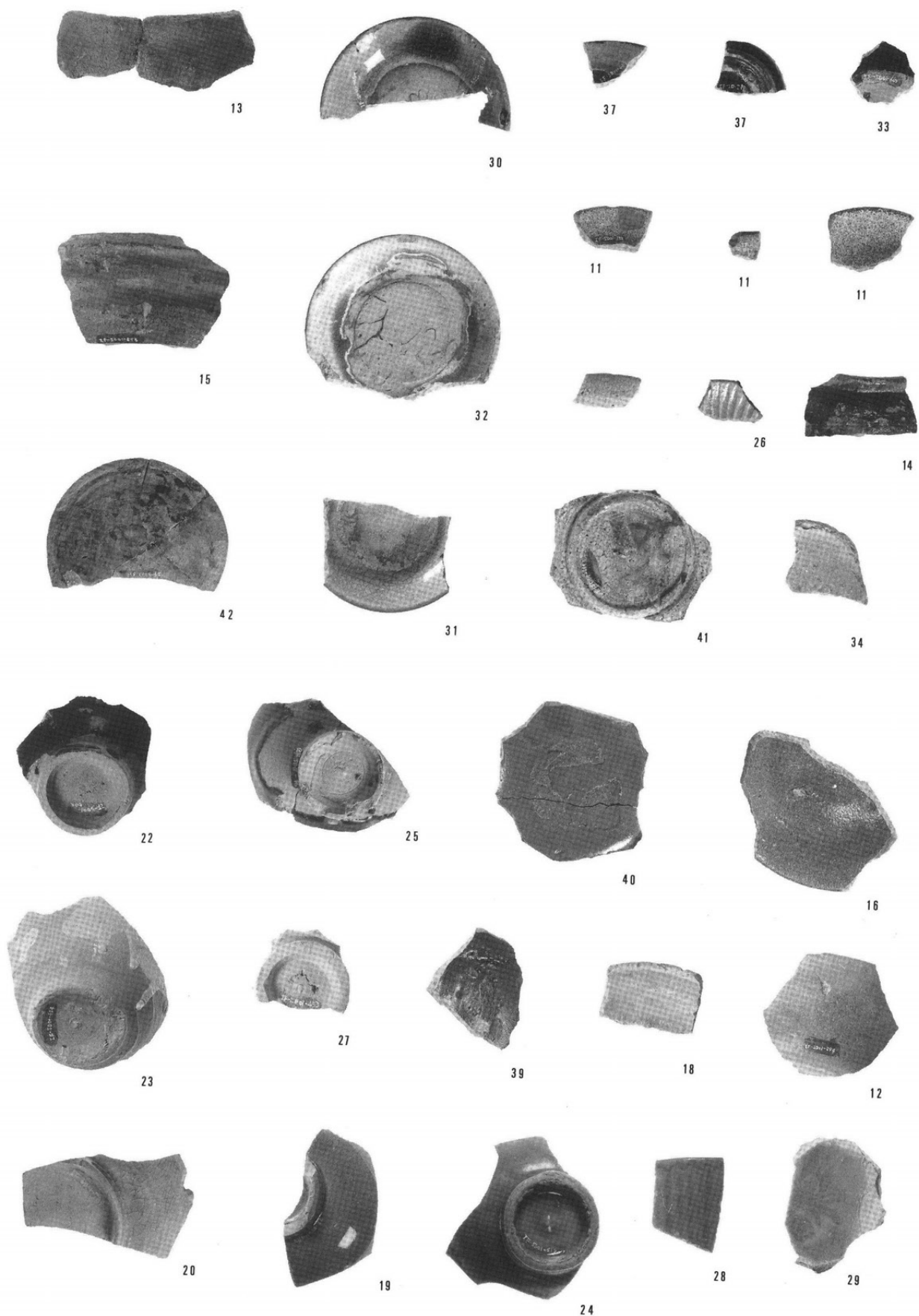
64



第25図 出土遺物(6) [1:6]



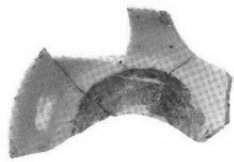
第26図 出土遺物(7) [1:6]



出土遺物 (1)



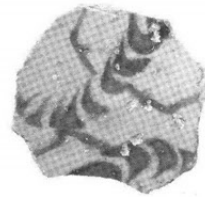
17



35



38



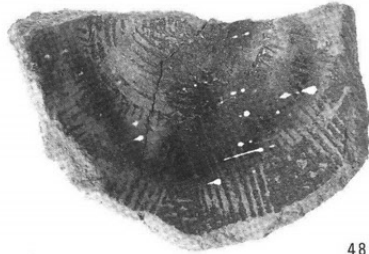
43



44



21



48



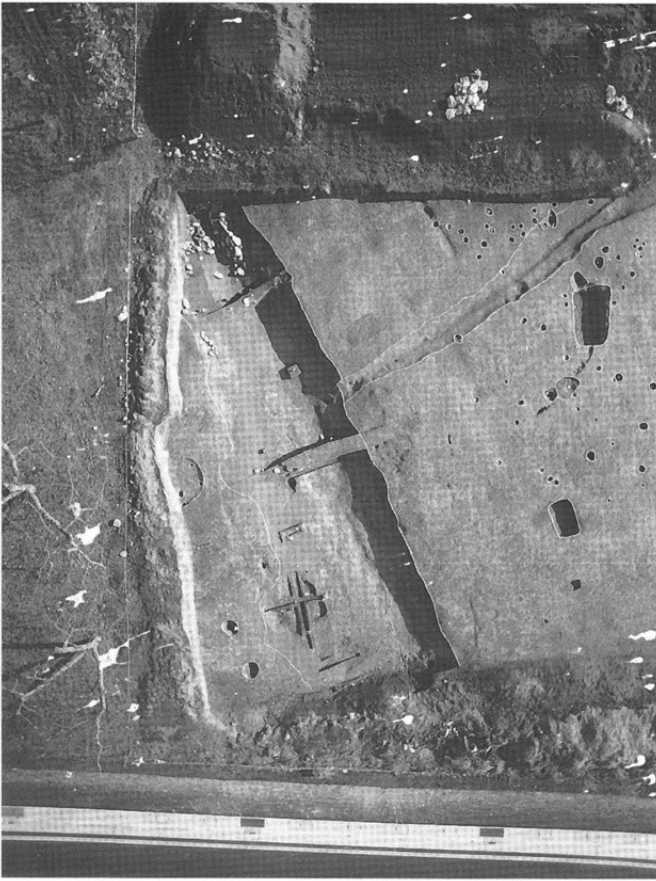
45



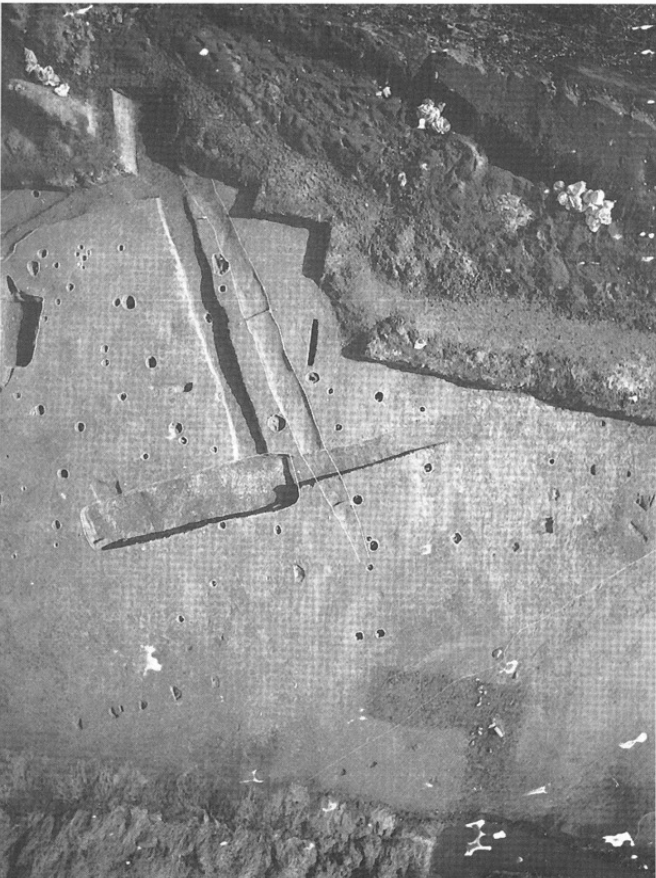
出土遺物(2)



調査区全景



調査区 北部



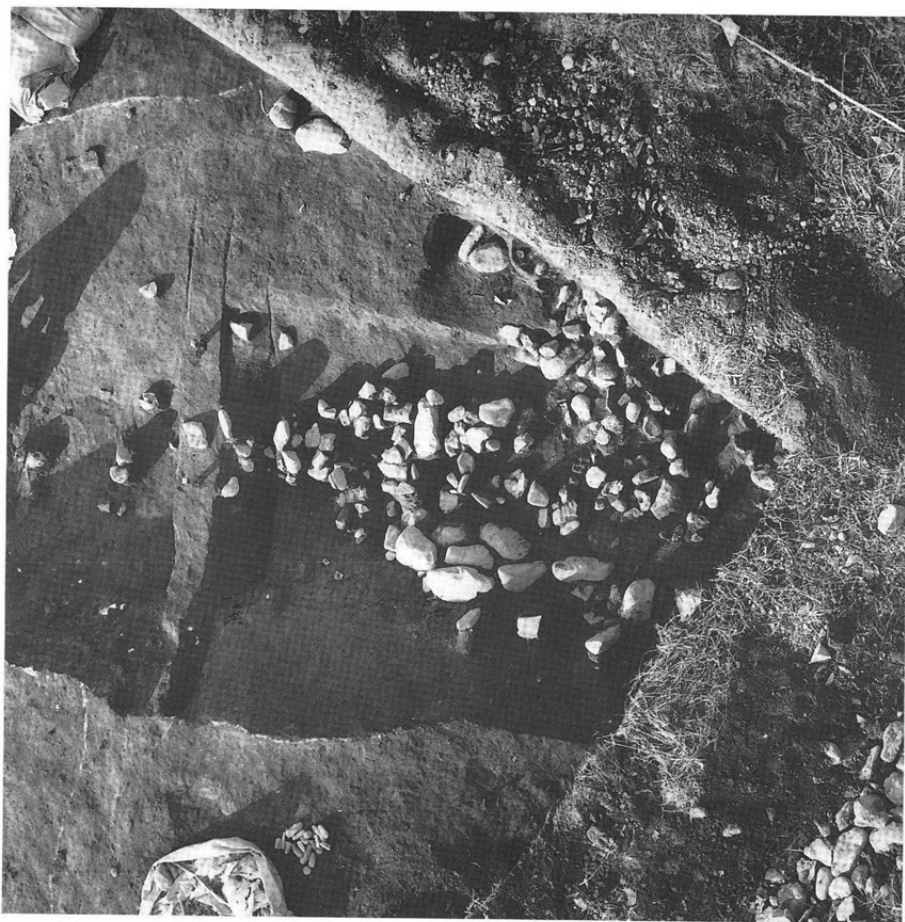
調査区 中部

調査区 南部



SD01 遺物出土状況





SD 0 1 内石組状遺構

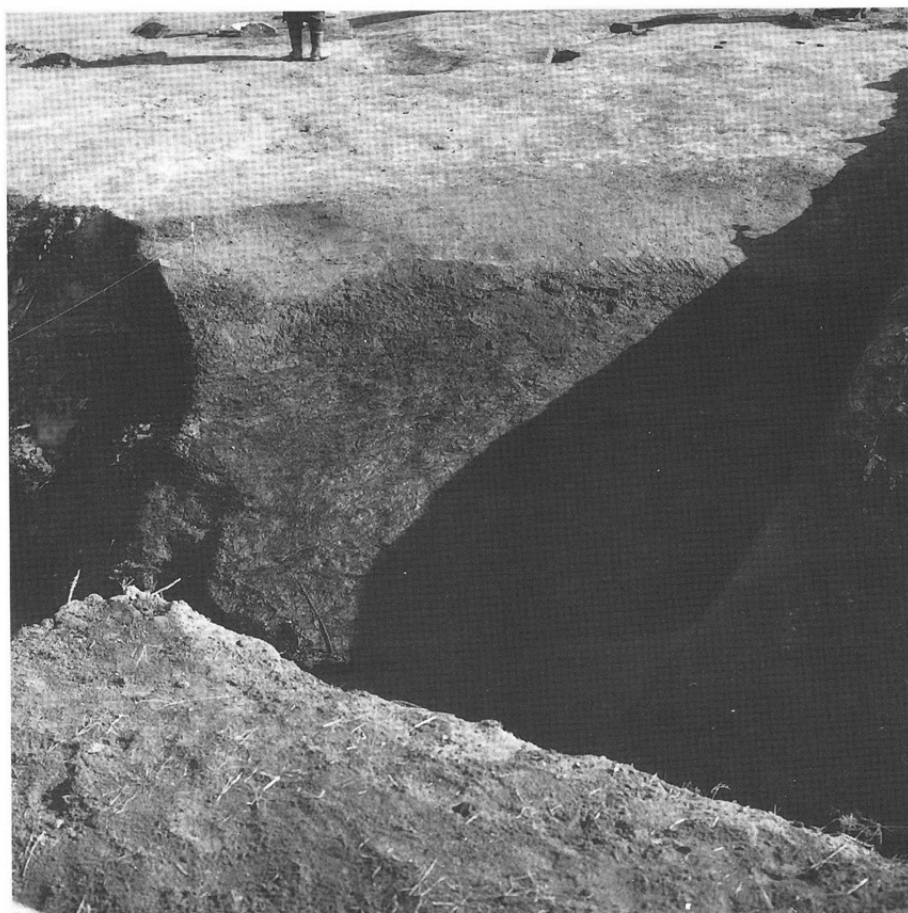


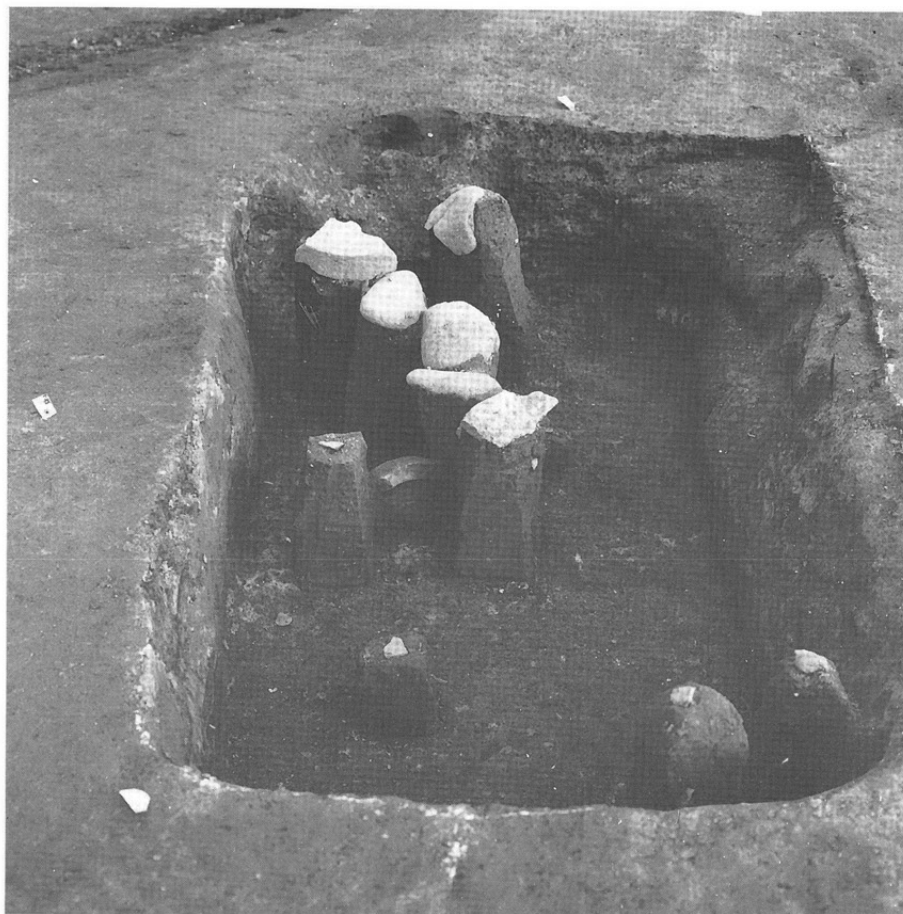
SD 0 1 完掘（西より）

SD02 完掘（南より）



SD03 植物遺体検出状況



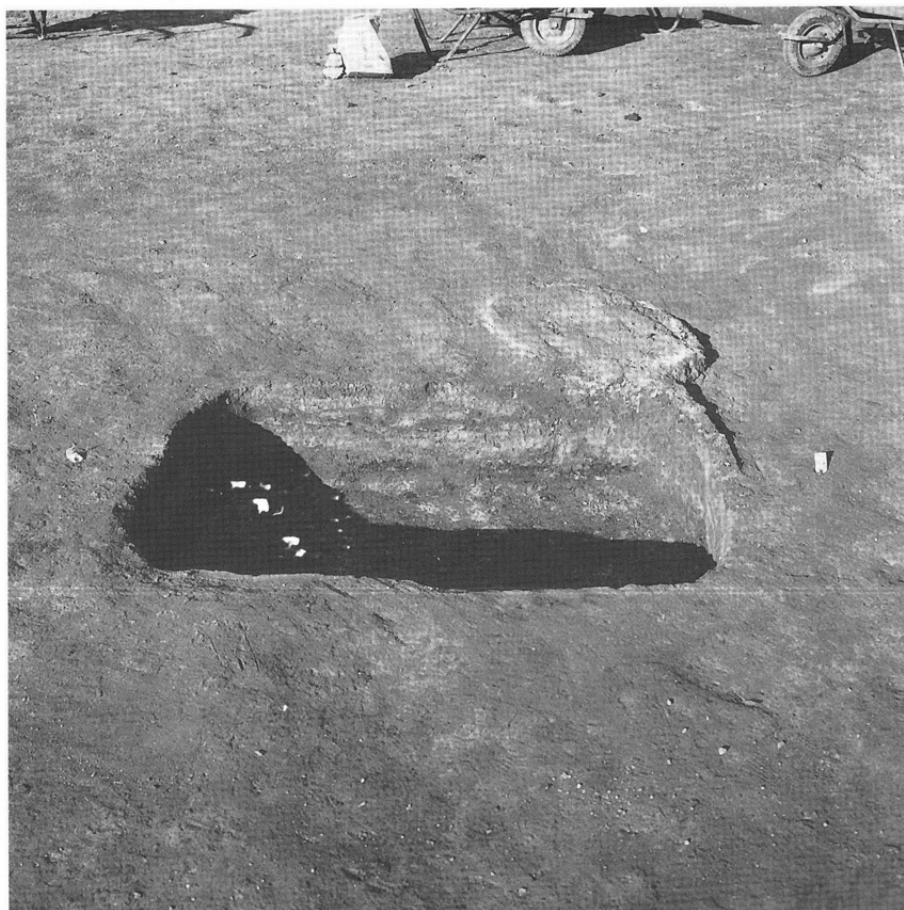


SK 01 完掘



SK 02 完掘

SK 0 3 完掘



SK 0 5 · 0 6 完掘





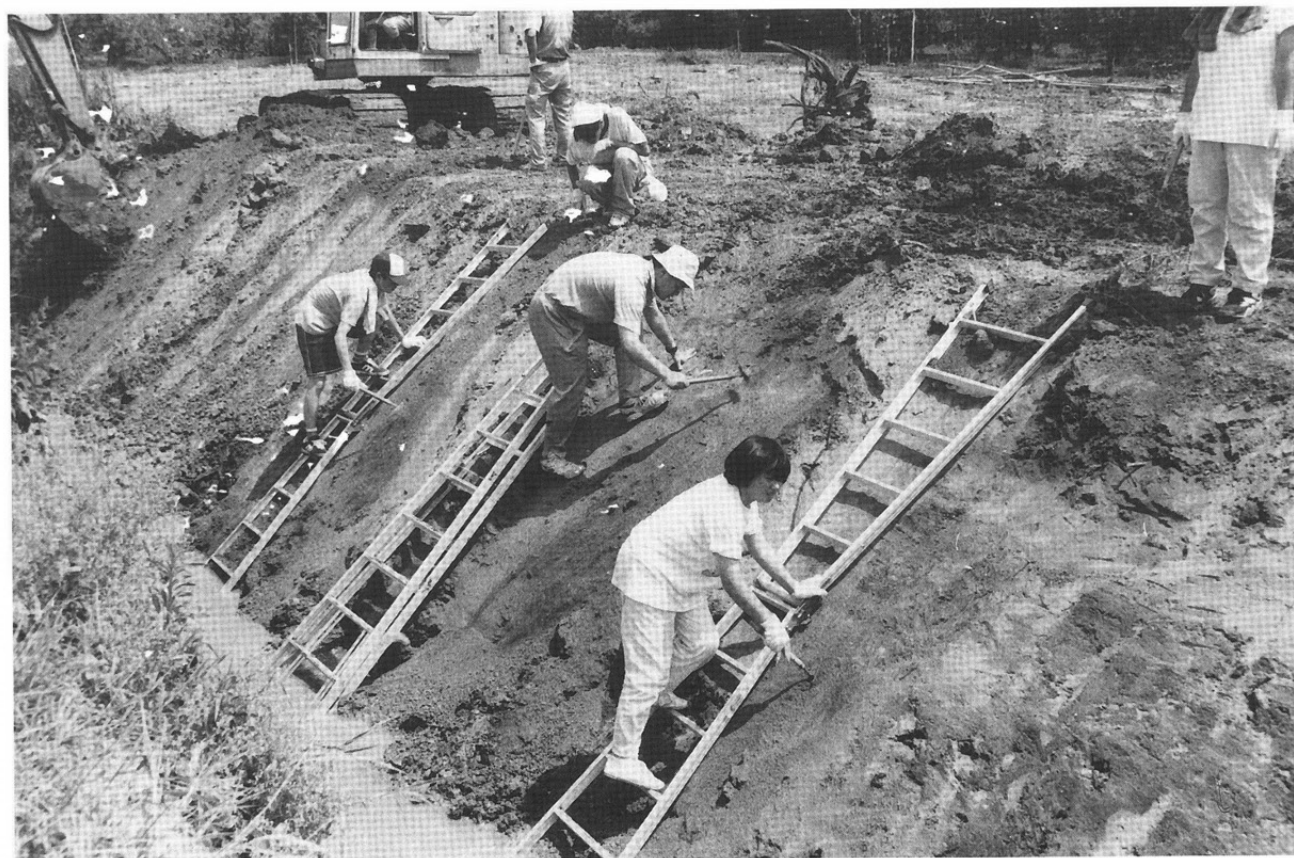
SD04 完掘



SD05 完掘



調査区全景（調査前）



調査風景

報告書抄録

ふりがな	いいだふるやしきいせき							
書名	飯田古屋敷遺跡							
副書名	飯田雨水排水ポンプ場建設にともなう発掘調査報告書							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	赤塩 仁 黒岩 隆 湯浅憲彦							
編集機関	小布施町教育委員会（飯田古屋敷遺跡発掘調査団）							
所在地	小布施町大字小布施1491-2							
発行年月日	平成8年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いいだふるやしき 飯田古屋敷	ながのけんかみたかいぐん 長野県上高井郡 おぶせまちおおざ 小布施町大字 いいだふるやしき 飯田字古屋敷	5419	15	36度 41分 33秒	138度 18分 00秒	平成7年 8月8日 同年 12月16日	373.78㎡	排水ポン プ場建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
飯田古屋敷	集落	中世	溝址 土杭 ピット	土器				

